

五月廿日第三種郵便物認可
昭和十五年一月一日發行
昭和十四年十二月廿日印刷納本

第六卷 第一號

浄土



一 月 號

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜



大日本印刷株式會社

本社營業所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 電話牛込 (34) 代表一五一〇番

櫻町營業所 東京市牛込區櫻町七番地 電話牛込 (34) 代表二四四〇番

銀座活字 東京市京橋區銀座七丁目四番地 電話銀座 (57) 代表〇〇七四番

大阪出張所 大阪 市北區西堀川町三四

神戸代理店 神戸 市神戶區榮町四丁目三六

滿洲國代理店 奉天 市鐵西區嘉工街三段ノ一



金



◇浄

土

第六卷
第一號

一月號

目次◇

表紙

扉繪・目次カット

川村良孝

鈴木金平

建設のよろこびを迎ふ

浄土宗
管長

郁芳隨園

(一六)

信仰
體験

威耀朗十方

金田明進

(一四)

新春隨想

淬礪の誠

江藤澂英

(一八)

若き日の思ひ出

安井大學

(一九)

麻三斤

佐藤賢順

(四〇)

野戰病院日記抄

東慈道

(三四)

皇紀二千六百年と佛教徒

作田高太郎

(二六)

福壽無量

佐藤春夫

(三)

信

仰

相

談

中村

辨

康

(四)

書道『書と云ふもの』……………赤尾 光雄（吾）

信仰と 病・光・生活……………榮久庵鐵念（二三）

座信 談仰 念佛の現證は可能か……………淨き友の會（四）

阪根翁のこと……………吉田絃二郎（三〇）

小 說 身替り名號……………佐賀一海（三四）

歌 壇 俳 壇……………與謝野晶子選（二）
……………太田耳動子選（七）

前 線……………だ……………よ……………り……………（一九）

日常勤行 式解説 如來に護れ行く生活……………中村辨康（五）

鑽仰運動ニュース……………（六）
編輯 後記……………（七）

◇淨 土……………第一卷 一月號 目次◇



理化學研究所製品
帝國學士院賞受領
日本化學會櫻井賞受領
世界十一國製法特許



健康増進に 理研ヴァイタミン

過勞を回復させる

ヴァイタミンAの不足は運動選手をスラムプに陥れると言ふ。全身の新陳代謝に大きな作用を営むヴァイタミンAが體活力増進に、疲勞の回復に重要な要素たることは勿論なのであります。

風邪ひかなくなる

風邪の豫防にヴァイタミンA・Dの効果は有名です。これからは過勞から風邪をひく事が多いから、風邪ひき易い體質の人は勿論、健康者もヴァイタミンA・Dを充分に攝つて呼吸器を護るべきです。

推奨される純良品

古くは肝油、最近では種々の肝油劑がありますが、理研ヴァイタミンは肝油から抽出した純ヴァイタミンA・Dを豆粒大の小球に濃縮せる純良製品です。ヴァイタミン含有量も消化吸収も斷然優秀で、健康増進に活潑な効果を信賴推奨されて居ります。

四〇球…二圓 一〇〇球…五圓 藥店にあり

株式会社 玉置商店

淨土

一月號



千とせふる

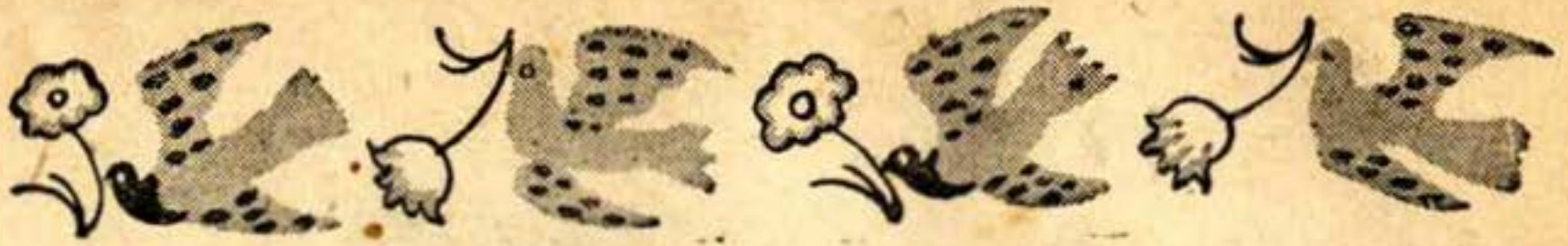
小松のもとをすみかにて

無量壽佛の

むかへをぞまつ

法然上人御詠



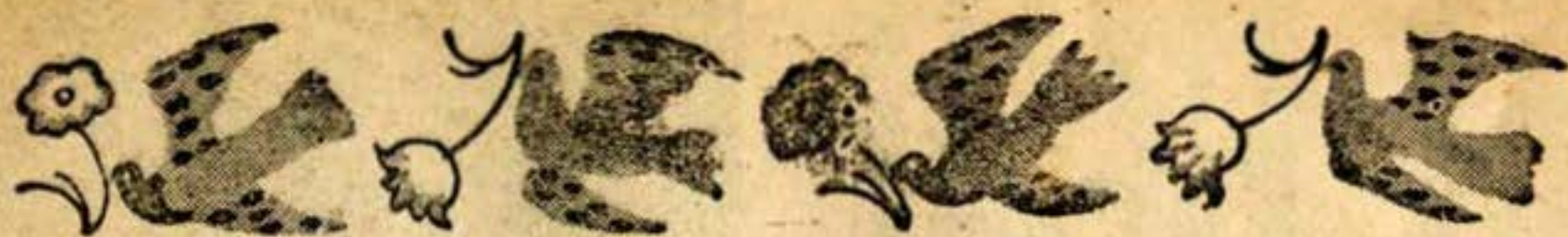


建設のよろこびをむかふ

淨土宗 管長
本會總裁 大僧正

郁 芳 隨 圓

人間はまことに勝手なものである。戦地にあるわが將兵の勞苦を偲べば、どんな窮乏困苦にも堪へられぬわけがない、それでなければ銃後の國民としての申し譯が立たない。然し實際生活となると、七分づきの米ではおいしくないとか、木炭不足では冬が越せないとか、マッチがない、毛のシャツがない、等々の愚痴や不平が出て来る。支那事變の世界史的意味、非常時國家の認識、——言葉には云ひ易くても、事そのことを少しも身に體得してゐない證據である。東洋の先哲は仁者をたとへて「靜かなること山の如し」と述べた。いかなる場合に處しても微動だにせぬ張り切つた信念の力が欲しい。むかしの勤王武士の詠んだといふ「うきことのなほこの上につもれかし、限りある身の力ためさむ」と確固たる決意が、胸にうかんで来る。かなしいことに、わたしたちの大部分は、今までの安易な生活に馴らされてしまつて居るので、實はいかなる峻嚴な現實にぶつからうと、かつてあつた甘い追憶を永久の實在として描いてゐるのではなからうか。歴史といふものの價值が、單なる過去の集積にあるのではなくて、苦しみ闘ひぬいて行かねばならぬこの生きた現在にあることを、わたしたちはともすれば忘れ



がちである。

ひとはたゞ目前の安易さに走りたがる。そんなものは根こそぎ捨て去つてしまはねばならぬ。ゆめにも未練を残してはならぬ。國家總動員はわれわれ國民大衆への新しい生活創造の呼び聲ではないか。これから新しい世に呼吸しやうといふ者が、不平不満の暗い陰影を背負ふばかりでどうしやうとするのか。

いまの今まで所謂文明世界から知らぬ顔をされてゐた東亞が、世界史のうへにひよつこり浮びあがつて來たのである。しかも世界の到るところの隅々から、こんなにも目をつけられてゐる東亞だとは、残念ながらお互ひについて先頃まで氣づかなかつたのである。そしてこの新東亞建設の重い使命が、他ならぬわが國民全體の共同責任になつてゐるのである。

耐へよ。しのべよ。いやそれ以上に、ま新しい生き方をつくらねばならぬ時である。明るい道は、新しい生活の建設からひらかれる筈である。さもしい習俗の虚榮を振り捨て、本當に生れかはつた生活にはいられなければならぬ。

然らば何うすれば新しい生き方が湧いて來るか。私は信ずる。如來の無量壽の中に生きることに依て新らしく生きて行かうとするありがたさをしみじみ感じ得ることを。則ち念佛の中に人格を改造し、そして正しい本當の生命を創造して行くことに努めぬるとき、初めて現實的に新東亞建設の爲の一員たる生活が出来るであらう。

私達國民に取つて最も大きな責任をもつ皇紀二千六百年よ。美しく雄々しき新東亞の誕生であれと祈らざる得ない。そして生きるよろこびを知る新らしき年であれと祈らざるを得ない。



滓礪の誠

—— 知恩院梵鐘後日物語 ——

浄土宗教學部長

江 藤 澂 英

礪の誠を讃美してみたい。(寫眞は知恩院梵鐘)

萬年の翠を湛えた京洛東山の一角、華頂の峰頭には瑞雲飄飄として、三門、大殿、さては祖廟といくつもの大きな堂が、森々たる樹立の繁みに夢のやうに浮きでてゐる。その間からボーンと巨鐘のうなりが、年立ちかへる清旦に、興亜の黎明を告げるが如く轟いてくる……

聖らかな梵鐘の音には、尊い幾多の挿話が秘められてもろやうが、今は暫く史實をはなれて、知恩院梵鐘後日物語として、名工が滓

それは嘉元年間、正宗が諸國遊歴中の出来事である。正宗といへば名刀や、刀劍師の代名詞となり、今日では銘酒にまでその名が冠せられて、普く人口に膾炙される稀代の名工であるが、彼の數多い門弟の中でも、村正、義弘等の十人は、古來正宗門下の十哲と稱へられてゐる。この村正、義弘の二人が正宗の弟子となつた經路には、涙ぐましいばかりの美譚がある。

國から國へと旅をつづけた正宗が、美濃路から伊勢に入り、京へ上る途すがら、桑名の

とある町はづれ、旅人宿の「おもたかや」へ泊つたことがある。旅の疲れに他愛もなく熟睡した正宗が、ふと目を醒すと、最早夜中過ぎ、只今の午前四時頃であつた、どこともなく「ファイゴ」で火を起す音が聞こえてくる。正宗はすぐ「ハ、ア鍛冶屋だな! 仕事場の仕度をしておるわい」と獨り寢床の中で考へてゐると、「ティーン」と槌の音。……ハ、アこれは普通の鍛冶屋ではない、あの槌音の牙から考へると刀鍛冶だな、何といふ刀鍛冶だらう、大分腕も出来てゐるやうだ。……久し振りで好い音を聞くわい」と耳を澄して聞き惚れてゐた。

やがて夜も明け放れて朝食時ともなつて、お膳が運ばれたが更に食べる様子もなく、箸で膳の縁を叩きながらテンカン、テンカンと鍛冶屋の眞似をしてゐる。女中や主人は皆な次の間からのぞいてゐたが、彼は一心不亂になつて膳を叩いて鍛冶屋の槌と調子を合せてゐたが：：忽然、アツ！と聲をたて「失敗た！最早これは疵物、必ず銘は入れまいぞ」と獨りつぶやきつゝ、漸く我に歸ると食事も蒼皇にすまして出立して行つた。

宿屋の主人は旅人が出發すると、最前からの様子が氣になるので、向ひの鍛冶屋へ行つて今朝の一部始終を物語つた。話を聞いた鍛冶屋の喜左衛門は不思議に思ひ、今打ち上げた刀を一應檢べてみたが、何處にも疵らしいものもない。更に砥石にかけてみると、豈計らんや忽ち一點の疵が現れた。「ハテこれは妙だ、槌音を聞いてこの疵を豫知とは凡人ではない、この刀に銘を入れるなどは：：獨言ではない、不肖への御注意……」と暫時無言であるが、鍛冶屋の喜左衛門はすぐと飛び出し旅

人の後を追ふたのである。二人は京に入つたが、圖らずも東山知恩院の境内で邂逅ひ、事の顛末を語つて弟子入をしたのである。

その旅人こそは名工正宗で、弟子となつたのは後に名高い村正である。今この師弟の協



力で知恩院の大梵鐘の束（鉤型のつりて）は鍛えられるのである。

淨土宗總本山京都東山の知恩院の大梵鐘の總重量は二萬貫、世界で第三番の巨鐘で、現

在のものは寛永年間（1624-1644）に雄譽靈嚴上人の發願で鑄造れたものであるが、元來のものも矢張何萬貫といふ巨鐘であつた。しかるに鐘に比べて龍頭が小さくて束が持たず、何度懸けても折れてしまひ、誰が改鑄しても無駄であつた。

正宗が京都に着いてからは、祇園、清水と毎日神社佛閣を巡拜し、各所でこの噂を耳にして、何卒佛縁を結ぶため、且つは自分が鍛えた刀で最後を遂げた人々の菩提のため、その鐘の鉤束を鍛えてみたいと發願し、知恩院へ參詣の序にその旨を申出たのであつた。知恩院では誠に奇なこと、非常に喜んで、早速境内の一隅に仕事場が設けられた。そこで正宗は今度不思議な因縁で師弟の縁を結んだ、喜左衛門の村正が向ふ槌で、鉤束の製作に着手つたのである。

知恩院の廣々とした境内では、本堂からボクボクと洩れて来る木魚の音に和して、勇しい槌の音がテンカン……と門外まで聞え、それは市中の大評判となつたが、名工二人が誠心こめた鉤束が出来上り、重量二萬貫の巨鐘

も無事見事に釣り上げられた。一山の喜悅は云ふ迄もなく盛大な饗供養は営まれ、正宗の名聲は一時に鐘の音と共に、洛中洛外に轟き渡つたのである。

×

伏見天皇の御宇、日本全國から十八人の刀工を選出して、各々一振宛の刀を徴されてその中から、天皇の御守刀を後選定になつたことがあるが、その第一に入選したのはわが正宗であつた。然るに當時、日本一の刀鍛冶と自ら誇り人も亦許してゐたのは、越中村松の住人郷義弘であつた。彼は己れが落選したので正宗を恨み、きつと賄賂でこの僥倖を得たのであらうと、造々と越中から相州鎌倉さして出かけて行つた。義弘は正宗の家へ着くと、すぐ窓際から仕事場を覗いて見たが、忽ち何か深く悟るところがある如く、今までの勢にも似ず、慙慙に刺を通ずるのであつた。正宗は有名な義弘と聞いて驚いたが、初対面の挨拶が済むと、義弘は「さて正宗殿、何を隠そう某が今日貴殿を訪ね、腕比べをし

て場合に依ては貴殿を打ち裂す覚悟で参つたが、今窓外から貴殿の仕事振りを窺つて全く恐れ入つた。某などは一升徳利を傍に酒を飲みつつ、暑い時には兩肌脱いで刀を打つが、貴殿の仕事場には神々しく注連繩を張り、隅々まで抜ひ清めて塵一つ止めず、何れも折目正しい務を着け、威儀堂堂と槌を取られる、その眼は少しも外に散らず、身も魂もその刀に乗り移るかと思ふばかり、それ程丹誠を込められてこそ天下の名刀は出来るもの、今迄腕一つで刀打つものと心得たは不肖の誤り、何卒今日よりは貴殿の弟子として、心の修行をさして下され……」と懇願した。これは「心の修行」として教科書にも載せられてゐる、趣味と教訓に満ちた名話である。明治大帝の戊申の詔書に「淬礪ノ誠」と仰せられてあるが、淬礪とは刀を鍛えることで、烈火で熱し、鐵槌で叩き、更に水に冷しまた烈火に投じ、更に鐵槌を下すのが鍛錬で、これを砥石にかけて研ぎ磨いて、初めて剛利決斷を德とする刀劍は出来上るのである。これが淬礪の誠である。

東亜の新秩序建設に當つて、日本刀の眞價は勿論、心の修業、身心の鍛錬こそは、刻下一億皇國民の最も大切なことである。山から掘り出した地金では何の役にも立たぬ。淬礪の功が積まれねばならぬ。人生の艱難悉く心の鍛錬であり、興亜の大業は須らく淬礪の誠を要する。今ぞ日本の國民は一人残らず心の名刀を鍛え上げねばならぬ秋である。「劍は剛利決斷を德となす、是れ智慧の本源なり」とは南朝の忠臣北畠親房が、神皇正統記に於ける叢雲の劍の解説であるが、これは心の刀がよく切れてすべての事現に迷はぬことを示したものである。淨土宗のお念佛は法藏菩薩が長戟永劫の御鍛錬で出来上つたもので「利劍即是彌陀號、一聲唱念罪皆除」とあらゆる惡業煩惱の繫縛を斷つて、極樂往生の大果を得せしむる、無上の寶刀である。洛東知恩院、華頂の山からは朝な夕な、大梵鐘の音は殷々として轟いてゐる、名工が淬礪の誠を傳へて……。



盛岡陸軍病院 佐野正樹
みいくさに二歳召され秋深し老いて
登しき親如何にます

評 大陸に轉戦して、早や二年の秋を迎へた兵士の感懐。大君のため不惜身命の誠を捧げる勇士も亦家郷に残した貧しく年老いた老父母の生活を思へば暗然とする。人の心を打つ佳作である。

松江陸軍病院 水海兵
車なる白衣のわれに行く人のおろがむを見て胸裂くるかな

評 つつましい歸還傷兵の複雑な實感である。武運拙く傷いて内地へ送られる身となつて車中の人となつたのを、沿道の行きずりの同胞が熱い感謝の思ひをこめて拜むのを見て、萬感胸にせまつて、悲しむのである。

大分縣 丹羽誠史
ゆふぐれの入江に馬を洗ふとき大さくのぼる月のさやけさ

評 天地のたそかれ時のしづかにして趣き深い様子を遠景にして、汀に身體を洗ふ馬を點在せしめた佳作。

東京 後井まき子

兄嫁と植ゑし田の稲みのりぬと戦地の兄へ告ぐる嬉しさ

香川縣 荒木はつ
み佛に祈りて捧げん土かひて老いがつくりし菊の初咲き

盛岡赤十字病院 齋藤友治
去年の秋大陸の霜ふみしめてわれも居にけり君と並びて

佐賀縣 宮中廣吉
野にちかく病みて臥せれば遠くより来る夜の時雨さやに聞ゆる

京都 永田七郎
あえかなる夕日を浴びて舟と村松の木間にうつくしきかな

盛岡陸軍病院 小倉秋郊
秋深み木の葉のちるに似る音のわが胸に鳴りものかなしき

逸名氏
いくばくもなき命もてなほ我れを思へる妻のかなしかりけれ

神奈川縣 深瀬益吉
かゞり火の消えて社のおほ前にいま招魂の式行はる

長野縣飯田市 宮澤榮子
わが峽を圍む山脈夕映えし雪の白かり青空のもと

和歌山縣 松尾察道
豊作に山と積みたる俵かな明るく暮す賤がふせ屋も

和歌山縣 奥村映水
秋雨や老ひたる父母は蓐食みて征さしわが子の上語るなり

朝鮮 盤口八年場
十一年病みぬるうちを忍びつつ救ひの道に逢ふもうれしき

徳島縣 丸岡長徳
病重き姉をみとると旅に行く父の姿は寂しかりけり

靜岡縣 一向山人
かねてより覺悟の日ぞと老いし父言葉少なに云ひて黙しぬ

東京 三輪幸雪
春の夜に白衣觀音まつりたるさち女も今は佛なりけり

福岡縣 三浦壽子
アダ號よしつかりやれと勵ますは飼主なるか涙わき出づ

兵庫縣 林伸子
病む母に告げへと思ふ父上の御墓の菊は今盛りなり

中支 神田機壽
肌寒し水際の鳥の足型も一波毎に暮れて消えゆく

小樽市 中村もん
史をかざる大みいくさに召されける子は初春を三度むかへぬ

群馬縣 樹山すが
入營のはたひらめきぬ兵の母なることに涙ながるる

東京 小泉妙春
やうやうに登ればきりもはれゆきて龍は遠し比叡のいたゞき

山梨縣 伊藤久次
終日を畑打つわざにうちこめて朝な朝なを起きがてにけり

北海道 花田順住
大君のみいつのうちに安らけし年を迎へて念佛しにけり

青森縣 丸尾傳山
戦勝の年を迎へて日のみはた輝く朝のここちよきかな

投稿規定

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あてに送ること。



片肺の闘病成功者が語る信仰生活記録！

病・光・生活

榮久庵鐵念

昭和十年四月二十九日 ミツチエルといふ醫師の詳細に亘る診断の説明を聞いて初めて自分が結核患者である事を自認しました。

其時は已に喉頭結核と結核疲癆に侵されて音聲は嘎れ肛門には耐え難い疼痛を感じてゐました、病室も小兒の拳大程ありました。だから末期も越へてゐて多分醫師達はホープレスとつぶやいてゐた事でせう。

入院中約一ヶ年半は發聲を許されず筆談してゐました。肛門の方は三度の手術をしまして今日では人工肛門によつて用を達してゐます。

昭和十一年六月二十六日 Thoracoplasty スラコブロスチーといふ大手術をワイレンといふ主治醫の手によつて施行しました。これは肋骨を切りとり外部の筋肉によつて肺を壓迫して肺の活動を停止さす手術で前

後五ヶ月間に四回行ひ肋骨十本を切除しました。

昭和十二年三月十九日身體の如何なる箇所にも微菌を認める事が出来なかつたので直ちに退院を命ぜられました。

右肺は完全に活動が停止され左肺だけで呼吸を至してゐるのでありますがその左肺にも一錢銅貨大の病竈が残つてをります。

この左肺の方は氣胸療法と申しまして肋膜の間に空氣を入れその空氣の壓力によつて肺の運動を静めるといふ療法で全快したもので只今ではこの穴のあいた肺だけで呼吸を至してゐるのであります。而も體量は十七貫、元氣で張切つてゐます。今夏期は兒童五十餘名の臨海學園を指導し一日二回の游泳を続け十日間に亘りましたが何の疲勞も感じませんでした、そればかりか一週間に自宅で休養しただけで直ちに北海道一圓を二日間講演して廻りましたが小便の不自由以外には何の苦痛もありませんでした、病後二兒を得まして二十人の大家族生活に

張切つてゐる私であります。日日は好日の恵まれた生活を感じてゐます。

○

私が初めて入院しましたのはブーマイレ・ホームといふサナトリウムで部屋は三人の定員の重患者ウオードでした、私の如き開教使の入院は初めての事で患者全部が喜んで妙な歓迎をしてくれました。私の隣りの患者は入れ替り此の地上から去つて行きました私の入院中だけでも三十人以上臨終に會ひました。誠に筆にも言葉にも盡されない妙々寂々の靈氣に觸れました。

彼等と共に枕を並べて居る間に私が僧侶でありますので基督教の舊教の僧侶の如くどんな悩みも私に打明けますし懺悔も至しますしそのいぢらしさに涙ぐみながら人の眞の聲を聞きその赤心を覗ひ知る事が出来ました。隣りにゐた一人の病友は死一日前「先生僕の一生涯は一生運を獨身で過す事です。私を最も苦しめたものは女です」と嗚呼其の聲を聞いたその時の私は喉の度毎に血塊が口に

溢れ (Absolute voice Rest)「發聲無用」の札がベツトにかゝげられてゐました。かくして彼等純情なる病友は月々何人となき他界して行くのでした。私はその懐しい病友の靈の前で心境の變化とそうして今の心境を思ふ存



分語つてみたいのです。

○

私は懐しい病友に手紙を書くつもりで又は病友の前で話をするつもりで心の動くまゝに筆を運びます。

○

結核に苦しんでゐる病友の皆様！

私はあなたの側で心のまゝを書きます。

あなたの心の中に沁み通れよといふ心持であなたの枕もとで力を入れて「生きん」とする力こそ結核患者の唯一の救ひです、治る病氣でなくて治す病氣です」とお話を致します。

あなたは善人です。純情です。嘘をいふ事が出来ない方です。人の困つてゐるのをだまつてみてゐられない方です。

あなたは詩がお好きでせう。繪もお好きでせう。子供も好きでせう。そうして涙もろいでせう。嬉しい時も悲しい時も涙が出て泣けるでせう。あなたは純情な善人です。

あなたは佛を拜む事が出来ませう。心から病氣全快を祈つてゐられるでせう。

その反響に私のやうな善人が何故こんな嫌な病氣で苦しまねばならぬかといふ拭ひ去らうとしても消し切れない不平が心の奥底に沈黙してはゐませんか。

こんな事をあなたに質問して甚だ失禮です

が實は病氣中の私の心であつたのです。ところがこの心境には大きな虚なものがあるのに氣づいたのです。この心の動き方は大きな間違ひであると思ふのです。

全世界で一番可愛いものは何でせう。金でせうか、名譽でせうか、女でせうか、親類縁者でせうか、いえ私自身が一番可愛いのではないでせうか。私自身ですね。私自身が一番可愛いです、その一番可愛私の肉體は病菌に蝕れてをり心には今申したゞけの動きしかないとすればそれでよいでせうか。私をもつと愛し私にもつと忠實でなければなりません。私に忠實である事が最も宗教的であるのです。私が最も可愛いのになぜ私を粗末にしたのでせう。この世界だつて私が觀てゐるのです。私がなければ世界はないのです。父も母も私のものです。私の世界の中にあるものです。もつと大きく申しますとみ佛様だつて私のものです。私の中にゐられるのです。あなたの涙は全世界の慈悲のうるほひでなければなりません。あなたが弱いと思へばそ

れまでです。行きづまりです。

あなたの世界が病室だけであるならあなたはそれまでの限られたつまらぬ存在です。

あなたの微笑は全世界を微笑ます愛の泉です。見舞客に對し合掌し病床でさよならをする時あなたの感謝の合掌は今宇宙の愛があなたの合掌を通してあなたに注がれてゐる事に覺めなければなりません。單なる感謝單なる合掌ではないのです。あなたの感謝あなたの合掌の中に全宇宙の佛の慈悲が満たされてゐるのです。そこに強い／＼信念をあなた自身で築き上げねばなりません。結核患者だから精神力も弱いなどといふ氣持を一掃せねばあなたは永久に苦しむばかりです。

○

かういふ事をあなたはお考へになつてはゐられません、それは大慈悲であるみ佛様がゐられてこの汚れた私をきつといつかは救つて下さるに違ひはない。でも同じ救つて下さるならなぜ早く救つては下さらぬであらうかと。これも大きな間違つた考へです。なぜと

申しますと例へばこゝに栗の實があります。

この栗は軟かい地上に落ちてゐます。春の大地の温みと燦々たる太陽の慈光にボンとはじけて力強く新芽をふき出します。然し栗の殻の中が萎びてゐては發芽しません、殻の中に生きる力がなければ太陽も土も効果がありません。結核患者が自分の信念の力弱くしていつかは何とかしてもらへるといふ事では佛様を冒瀆してゐる事です。弱いといふ心の動きがなくならない上は光がいかに強くとも水が豊富でも、言ひ換へますと如何なる環境におかれましても病氣は治りません、人としても救はれません。生氣、信念の強ければ強いだけに強く生きられるのです。

佛の救ひをまつてゐてはなりません。佛は已に救つてゐて下されます。

病友の皆様、只今から心の方向を一廻轉して下さい。世界は他人のものではない、みんな／＼あなたのものです。

佛は極樂にいられ苦しんでゐる病人を遠見してゐられるのではないのです。佛はあなた

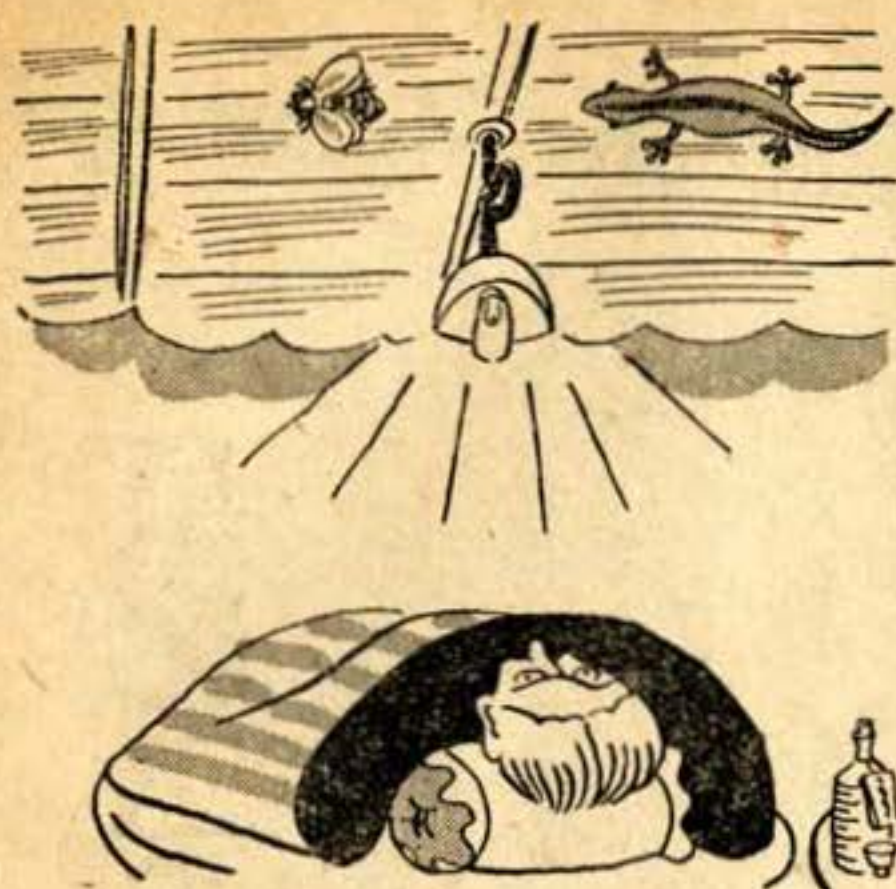
の中に満ちてゐられるのです。佛はあなたの
中に生かされてゐられるのです。

○

あなたは純情で善人でゐられたがそれは弱
い純情であり小さい善人でゐられたのです。

宗教家も教育家もみんなその型の中に生きて
ゐられたのです。何々だから何々せねばなら
ぬといふねばならぬ生活でありました。

今のあなたには型は要らないのです。強く
生きて行く事再生、廻心こそ唯々尊いのです。



心身ともに再生せんとする努力には苦痛は
ない疲れもないのです。うれしく明るく樂し
いものです。日々の心新なる再生こそ救ひな
のです。

○

生きる法悦について今一つ私の體驗をお話
しませう。肉體だけの苦しみにも種類があ
りまして、疼痛、眩暈、嘔吐、飢渴、癢り、
そして氣も遠くなつて嫌な淋しさにおそわ
れる苦しみ等があります、これが同時にせま
つて来る時の苦しみなど大方の人には想像が
つかないと思ひます。こゝろいふ苦しみの中か
らぼんやり天井をみつめてゐました。すると
一匹の守宮が蠅を追つてゐるのをみつけまし
てあの自由に動ける宮守になりたいと心から
思つた事がありました。又眞夜中床下で戀猫
が騒いでゐますと人間に生れてこんなに苦し
んでゐるより猫に生れた方がどんなにか幸福
であらうなど思つた事がありました。寝返り
をしても喀血します。こんなに苦しむより靜
かに死なうと、何度思つたか分りません。

其頃名前を忘れましたが、或方が次の様な
話をしてくれました。

「死ぬる位簡單な事はありません。誰だつて
死にます。萬人が萬人、自然に死んで行ける簡
單なものです。死に直面して尙限りなく生き
んとする姿こそ神です。溺れんとする人が本
能的とは言へ巖角に向つて力強く手を差しの
べてゐる姿こそ生きんとする神の姿です」と
この言葉を聞いて俄然私の全身は生きる法悦
に充たされました。「私が再生すれば妻も子も
両親もどんなに喜んでくれる事であらう。い
え／＼一番嬉しいのは私だ。」生きる法悦を眞
正面に味はつた時私の全身に生きる力がみな
ぎりしました、それから熱は去り食欲は日に
増し顔色もよく體重も毎週増して來ました。

優しい病友の皆様、佛とは生きる法悦です。

生きる法悦こそ人生の總てです。
穴のあいた片肺で日々感謝で生かされてゐ
る私の心の波動があなたの心の眞中に筆以て
の生きる法悦を運び行くならこの上なき幸ひ
であります。

皇紀二千六百年と佛教徒

文部政務次官

作 田 高 太 郎

一

紀元二千六百年！ 橿原の聖域に建國日本の朝が明けて以來數へ數へてこゝに二千と六百、天地と共に無窮につゞく祖國のいのちは、茲に輝く記念の春を迎へた。皇風天下に洽く、一億の民草たゞ歡喜にふるふ。めでたい年だ、大いに祝はう。だが東亞は、世界は、今戦争の劫火に包まれてゐる。謂はゞ、吾々は硝煙彈雨の中にあつて祝杯を擧げなければならないのだ。もとより吾々は、股々たる砲聲の代りに、嫋々たる平和の鐘の音を聞きながら、この榮えある二千六百年の佳き歳を迎へたくはあつた。しかし、吾々の祖先が未だ曾て経験したこともないほどの難局を、この吾々の手によつて突破し、吾々の子孫に二度と再びかゝる苦杯を嘗めさせない様に出来れば、これに越した意義有る紀念事業はあるまい。この意味に於て空前絶後の

非常時なればこそ却つて、この熾たる記念の春を迎へたことを悦ばなければならぬ。

ところで、吾々は、ことに佛教徒としての吾々は、この悦びを悦びとして、さて先づ何を考へ、何を爲すべきか。答は簡單である。いふまでもなく、佛陀の教旨に従ひ、その眞意を體得して、これを時艱克服の上に具現すること望ましい。

二

佛教に縁起といふ思想がある。諸法は因縁によつて生ず。宇宙一切の萬象は相互依存の關係に外ならぬ。しかもその關係たるや極めて複雑微妙、一箇一物の存在のためには無數の因縁が縦横に交錯し纏繞する。一つの力は他の一切の力によつて支られ、一切の力はまたその一つの力によつて支られる。たつた一つの物資といへども一切の因縁力の所作であり所成である。す



べての力が互ひに重なり合ひ支合つて、初めて一つの生産が果されるのである。すでに一切力の所産であり一切縁の所成である以上、一力一縁を缺いても萬法は成立しない。こゝに何びとと雖もみづからの一分の力を誇ることを許されない。俺の金で俺が買つたのだから、どうしようも俺の勝手だ、自由だ」といふやうな考は斷じて許されないし、また決して起り得ないと思ふ。却つて一涓一塵のかりそめの財といへども、それが一切力の所産であり因縁所生の法なることに想到すれば、そこに感謝の念はおのづから湧き、「勿體ない」「お蔭様で」といふ聲が思はず發せられるのである。

要するに、この縁起觀によつて「勿體ない」「有難い」「お蔭様で」「無駄にしては」「大切にしないで」といふ感じを起すといふことは、やがて資源の愛護、冗費の節約などといふ方面に於て精神的基礎を確立することになり、現下の國情に鑑み、まことに有意義なことと思ふ。

三

右の思想は、さらにこれを個人全體、個人と國家の相互關係に當てはめて見ることが肝要である。

そも／＼近代に於ける一般社會の風潮は、産業革命以後、澎湃として起つた營利主義の結果、極端な個人主義、自由主義に起り、個人の利益の前には全體を犠牲にしても顧みないといふ

有様になつた。尤も、この個人主義、自由主義は、始のうちこそ人類の進歩發展に貢獻もしたが、その赴くところ、いつしか個人と個人、個人と全體との對立が益々激しくなり、自由の擁護は却つて全體社會の發達を妨げることゝなつた。そこでこの弊害に鑑み、從來の個人主義、自由主義に對して、いろ／＼の角度から反省が加へられ、さまざまの視野から、個人對全體、個人對國家の再吟味が行はれるやうになつたのである。

ところで、個人對國家の關係については、從來の歐米流の考へ方では、個人が國家を造つたと觀るのと、國家が個人を拘束すると觀るのと、二つの見方がある。しかし、個人が造つた國家であれば、個人の意思が最も尊重されるべきであり、個人を拘束することによつて成立するのが國家であれば、國家があるだけで個人の意思などは問題でなくなる。そのいづれも個人對國家の問題を解決するものとして不都合といはねばならぬ。

では、その不都合はどこから來るか。それは、國家と個人とを二元的に觀、別個のものとして取扱つてゐるからである。しかし、國家と個人とは決して個々別々のものではなく、作用を異にする一つのもの、二而不二の關係に立つものと觀るべきである。國家に對して個人の存在は部分として觀られるが、それは全體の一部としての單なる部分ではなく、國家全體の存在に際りをもつ部分なのである。従つて、個人を活かすことによ

つて國家も活き、國家を活かすことによつて個人も活きる。この意味に於て、國家と個人とは切り離すことは出来ない。

四

佛教には、さらに、回向といふ思想がある。自己なる個我に囚はれ、自己のみの完成を望むことに矛盾と無意義とを感じ、常に自己の願行と全人格とを一切の衆生に手向けて、われひと共に同じく菩提涅槃の境地に到らしめやうとする犠牲的奉仕的精神を謂ふのだと聞いてゐるが、この回向觀に基いて、全體のために、國家のために、個人を、おのれを犠牲にし、小我を捨て、大我に就くといふ没我の精神、滅私奉公の心構へを養ふことが大切である。

しかし、没我の精神といひ、滅私奉公の心構へといったところで、國民各個の心の奥底に、烈々焰のごとき熱意がなくてはならぬ。ねばりにねばつて何處へでも喰ひこんで行く根強さが必要ならぬ。生きねばならぬときには石にかじりついてでも生きて生きて生き抜くだけの金剛不壞不退轉の精神力が是非とも必要だ。だがこの精神力は、所謂安心立命の境地に到つてこれを得べく、従つて、佛教徒としての理想境と難局突破の要諦とは、いみじくも茲に合致するものだといふことが出来る。

しかし、或者は言ふ。宗教ことに佛教は消極的だから、非常時日本の打開には害あつて益なしと。しかし、それは單に究極

への道程が消極的だといふのみで、究極そのもの、安心立命の境地それ自體に至つては、決して消極的でもなければ退嬰的でもない。それは明かに積極的能動的進取的なる精神力發生の一大源泉に外ならない。萎靡困憊のドン底に、喘ぎ、悶え、苦しんだ民衆が、どれだけ宗教によつて救はれたか、どれだけ更生の一路を辿り得たか、さうして、それが國家の上にどれだけの躍進をもたらしたか——今更、東亞の青史を繰き、古今の事蹟を究むるまでもなからう。宗教が、佛教が、現在の日本にとつて有害無益だとは斷じて考へられぬ。

五

以上はその一端にすぎないが、要するに、日本は今や肇國以來の大理想を實踐すべき氣運に向つてゐるのだから、吾々佛教徒も、過去千幾百載の久しきに亘り、佛教がわが國民精神の振作更張の上にどれほど役立ったかを深く想起し、これに矜持と責任とを感じつゝ、佛教による國家奉仕の赤誠をいやが上にも發揮する覺悟がなければならぬ。そして、吾々の一人／＼が、新秩序の殿堂を築くべき一本の柱となり、一本の釘ともなつて國威を海外に宣揚し、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らなければならぬ。かくてこそ眞の佛國土は建設されるのである。また、かくすることが、即ち、皇紀二千六百年を迎ふるに當り、特に佛教徒に課せられた一つの誇るべき大なる責務だと思ふ。(畢)



信 仰
體 驗

若き日の思ひ出

淨土宗主事 安 井 大 學

ある秋晴れの日、友人達と小舟で、中海といふ松江の近くの大きな内海に遊びに出た。汽車辨當に壹升船とすつかり準備がととのひ、いよく出發となると漕ぎ手のない事に氣がついた。丁度學生時代に蕎麥屋にとび込みさて勘定となると誰れも持つてゐないといつたのんきさと同じで、誰か一人位は知つてゐるだろうと皆が思つてゐたのであつた。

さうなると敗けざらひの私は

「なあに、やれない事はあるまい」

と櫓を握つた、スタイルにはいさゝか颯爽さは缺けてゐたであらうが案外うまい、暫くやる中に舟は氣持よく前進する。

「うまい／＼天才だ」前生は船頭か

おだてられると嬉しくなる、いさゝか得意になつたのが失敗の原因であつた。

それは宍道湖の水が唄で名高い

大瀬川を通つて中海にそゝぐ、今私達の舟は大瀬川の中央を中海の方へ下つてゆくのだから、つまり水の流に推されて舟は獨り手に進む譯だ。それを私の腕の力と思つたのが大間違ひであつたのだ。

どうにか、かうにか中海の中央に舟が進み出た。碇を下ろして心ゆくばかりに暗れた高空を仰ぎつゝ、痛飲快談、時刻のうつるのを忘れた。

その内に少し空が曇つて來た、



戦場の月宴

中支〇〇部隊 辻重光少尉

(前略) 先生方には益々御壯健精神報國第一線に御奮闘の條大慶に存じます。過日北海、道御巡錫中おはがきを賜り有難く拜見致しました。小生お蔭様にて愈々元氣であります。

久し振りにて「淨土」九月號を拜見諸先生方の御活躍を見、一人思はず快心の笑を漏し懐しくなりました。眞野先生にも益々御元氣御回復の由喜んでおります。召集一年諸先生方にお離れしてより、戦に次ぐ戦、活字にも長らく離れて、今頃稍落付いて活字に見参、先生方のお名前を見ただけでも誠に喜ばしく



やがて雨がふり出した。然し酔ふてゐる連中だから平気で反つて面白がつてはしやいだ、

「折角水のほしい處だ」

と皆一齊に大口をあけて受けるといつたさわざ、その内に次第に波が高まつた。舟がひどくゆれ出した、ビショぬれになり肌の冷たさを覚えて初めて我に歸つた時には周囲に舟らしい影は全く見えな

くなつてゐた。

少しは心細くはなつて來たが

「なあに、漕ぐ事は大丈夫だよ」

とふらつく足に力をいれて立上

つた。そして櫓を握つた、さて漕

がうとすると不思議にはづれる、

どうも調子が悪い。

「しつかり持つてゐてくれよ」

はづれぬやうに皆がおさへて見

たが、どうもうまくゆかぬ、舟は

ぐる／＼まはる計り、

然も沖へ／＼と流され

てゆく。

あせればあせる程調

子が狂ふ。皆の赤い顔

がいつしか眞青になつ

た。私は眞に精魂のつ

きた思ひで汗と雨にビ

ショぬれになつてへた

ばつて了つた。私達の

舟は怒濤に翻弄されつ

つ日本海を漂流する事となるのだ

すると大根島の影から一艘の小

舟がこちらへ來るのに氣がつい

た。十五、六歳の少年だが仲々う

まく漕ぐ。是れこそ救ひの舟だ。

皆口をそろへてよんだ。

「オイ、助けてくれ！」

然し酔つばらいがからかふと見

たのか對手にしないで、ぐん／＼

ゆき過ぎて了ふ。これにゆかれて

は大變だ。それこそ一生懸命だ。

聲を限りに何度も叫んだ。

すると向岸、そこは舊幕時代か

らの有名な松原街道だ。其松の下

で仕事をしてゐた一人の老人があ

つた。私達のさわざを先刻から見

てゐたらしく、見るに見かねて、

「オイ○○、松江の方を連れて歸

つてあげよ」

すると例の少年は始めてこちら

を見て濫々舟を寄せて來た。

なります。

稻穂洋服店のニュース、小生

附近の者で「浄土」へお世話し

たのが、講習會を開き、中村先

生の御指導を受けしとのこと、

誠に喜ばしく存じます。

服部覺善氏の廬山遊記も我々

の先輩が熱汗熱血を重ねた惡戦

苦闘の古戦場、我々は名跡舊跡

を尋ねる暇なく通過しましたが

面白く拜見しました。

本日は大隊の追悼會を執行し

ました。去年の本日我が大隊が

廬山で大奮闘せし銘記すべき日

であります。しかも本日は満月、

月見宴です。實に良い月です。

日は西山に没しの詩の西山は

この附近です。月光に遙かに見

えます。今我々の附近にある支

那人は食物、衣服にも窮してゐ

ますが、風流味と云ふか、習例

と云ふか朝から晩にかけて、月

見宴のために盛んに爆竹をばり

私達には眞に地獄で佛の思ひで、ありつただけの謝辭と讃辭を呈した。

彼は自分の舟に私達の舟をく、りつけて漕ぎだした。私達はほとと一息といった氣持で互に顔を見合せた。

然し氣がついて見るとどうも舟が進まぬ。

向岸の松原がまだ西の方へ起つてゆく處から見ればまだどん／＼流されてゐるらしい。暫時は心算してゐたが遂に不安に耐えられず口を切つた。

「オイ君、舟が少しも進まないぞ」

「私も手傳して漕がうか」

と例の櫓に私が手をかけると、

始めて彼は怒つたやうな聲で

「だまつておいで！」

といふ。

今彼に怒られては大變なので、

皆がだまつてはゐるものの不安さは格別だ。

すると松原が西へ起る速度が次第々々におそくなつた。と氣がつくと松原が動かぬやうになり更に少しづつではあるが反對に東の方へ起るやうになつた。

「舟がすゝむよ」

「うまい／＼」

私達が狂喜した時には彼は悠々汗をぬぐひ乍ら片手で漕いでゐる。

それでも舟足は段々速くなり見る見る川口に入る事が出来た。

私は此時程胸を打たれた事はな

い——。

舟の流れる時にはどんなに漕い

でも駄目だ、と同じやうに人生の

浪路にも人間の力でどうする事も

出来ない時があるのではなからう

か、然し其時でも、ありつたけの力で唯漕いで居ればいゝのだ。唯力一杯を捧げて居ればいゝ、その内にいつかは潮の波にのるであらう、その時には易々と目指す彼岸につく事が出来るのだ。蛇蝎の聖訓もまた、所謂凡夫の智慧で徒らに右顧左顧する事は山鯨頭といつてうまく舟を進める所以ではない。

彼岸へつくとかつかぬとかさうした事は一切如來に任せまゐらせていそがずに、やすまらずに、念佛しつゝ、唯漕ぐ事だ、そこに人間のほゝゑみがあり、生きがひがあるのだといふ事を痛切に感じた。

東亞建設の新春に當り、ふと二十年前の此小さな體験を思ひ出し感を得たにした次第である。

／＼やつてゐます。戦争は他國でやつてゐる感です。しかも昨今は作戦中で遙かに砲聲も聞え、我々は出動も豫期しております。法然上人御詠の月影の歌を深く滋味せざるを得ません。

(後略)

貪り讀む淨土

北支○○部隊 川原睦人

又本日は「淨土」をお送り下さる有難う御座居ました。戦場の無聊をなぐさめてくれる唯一の雑誌にて戦友一同むさぼり今も讀んで居ります。生死は問題にして居ない我々では有ります。が心の奥底には何かものたらぬ淋しさのあるものです。それを少しづつこの雑誌によつて慰められて行くのがわかります。我々は唯任務に就いて邁進致します。これが天皇陛下の御爲です。何一つ思ひ残すこともありません。



福 壽 無 量

市に米無きを徒らに憂ふる勿れ

佐 藤 春 夫

長期聖戰下の現代ほど精神力に訴へなければならぬ問題の多い時代もすくない。それでゐて現代ほど精神の問題を無視してゐる時代も珍らしいのだから不思議である。不都合である。

一例を言へば米の問題である。米が無くては困るのは申すまでもない。それ故、そのくめんに爲政者がやつ氣になるのは責任上當然の事で、それは甚だ有難く結構である。爲政者が政策を誤つたがために有る米が市場に無くなつてゐるならば、これは失政に相違ない。否、古はその歳が不作だといふ自然の場合にさへも爲政者は己の不徳の所爲に歸してこれを自ら省るの機會としてゐた。これが精神を重んじた時代の事であつた。我々は昔をそのまゝ現代に當はめようとは思つてゐない。それ故、雨や風のために歳の實らないのまでは爲政者の責任に

しようとは思はない。

天の恵みを受けることが出来なくて米が無いのならば全く致し方がないではないか。天は常に興へてくれるが時には興へ得ない場合もあるものである。我等は天の恩恵に狂れ過ぎてはならないのである。天の恩にも人の恩にも狂れるべきではない。昔は歳が實らないといふ場合などは交通の不便のために一方の民は多く飢えた。もしそれが全國民的な場合などはこの惨事は全國にも及んだものであらう。これ等の過去を考へると現代の米の問題などはまことに贅澤千萬なものゝやうな氣がしてならない。何も全く絶食しなければならぬといふ程の問題ではない。三食を二食にしても、飯を粥にしてもしのぎはつかうではないか。それを爲政者が責任上憂へ憐むのはいゝとして、國

民——それも非常時局に處しようといふ國民がこれしきの事にとひと少しでも狼狽するやうな事があつては實に見るに堪へない話である。

大きな志のある者は、妻が米櫃の空しいのを訴へる場合など、一日や二日飯などは食はなくてもいゝと一喝するのは、格別傑出した古人だけではなく現代の男子にでも珍らしくない現象であらう。

武士は食はねど高揚子とやら、また人はパンのみにて生くべからずとか、物質の窮乏に對しては今日の人士と雖も時にはこれぐらゐの氣位や考へ方があつてもよからうではないか。

毎日、三度／＼白い米の飯の温かいのを食ひ慣れて、それを感謝することを忘れてゐる現代人のためには、時に米の不足するの國民教育として絶好の機會である。かういふ苦痛を一日も少くしようといふ爲政者の苦慮も有難いが、一面には無くなつたら出来るまで食はないで我慢してゐたらいい。二年も三年も食へないのでは無いと一喝する位の精神を發揮する人があつても宜からう。尤もこんな言ひ分は政治家などの申し事ではあるまい。さしむき宗教界あたりから出ていゝ意見ではなからうか。

この際、有る米を出し惜しみするやうな向へも、爲政者が權力を以て強制的に出させる方法よりも利他厚生心を振ひ起さ

せるやうな運動が宗教家の仲間から生れるやうな事があつた方が國家としても國民としても立派であらう。さういふ運動などに促されることなしに個人が個人の意志でさういふ氣持になつてくれたら、それが第一である。

どうしても米が無い。國人もくれないとあれば、如何とも致しがたい。天命である。この現實の前に、お念佛を申して精神力を發揮するだけの覺悟も必要であらう。人はパンばかりでは生きてゐない。精神力も亦國民の、個人のよき糧であることを忘れてはしくない。就中、宗教家たちにこの日、この際、これを申したいのである。

こんな際に、お念佛など申してゐたら、なほ空き腹が空くなど、屁理窟を申す連中は西洋かぶれがしてパンと理論とばかりで生きてゐる手あひである。屁理窟はやめて一度お念佛を申し見るがいゝ。お念佛は行の徳である。理窟ではない實行して後にはじめて功德がわかるものだから、君が一度お念佛を申した上で醃を洗つて出直したら改めてお話をしませう。

豫言者ヨハネは、蠅と水とを食つて野に獅子吼してゐたとやら。腹に愛國の信念を持つてゐさへすれば木の根と水とを食つてゐても當分は生きられさうなものである。何もさう、うろたへ騒ぐことはあるまい。憂ふべきは市に米のない事ではなく腹に信念のない事ではあるまいか。

野戰病院 日記抄

(三)

東 慈 道



野戰病院日記抄

(三)

東 慈 道

三月二十九日

今日も午前中は三十七度代の微熱で気分が
快々としてゐる。

「チブス菌が出なかつたよ」

早朝、K衛生兵が昨日の検便の嬉しい報告
を齎して來た。何と恵まれた日だらう。長い
間の陰鬱な氣持が一度に霧消した。もうすぐ
全快するやうに思はれて、微笑が知らず識ら
ずのうちに口もとに浮ぶ。目に映ずるものが
悉く愉しく見えて愉快でならない。

「大變な御機嫌だね」

と日衛生兵が笑ひながら遣入つて來たが、
續いて白いガウンを着た班長も遣入つて來
た。班長は右手に大きな注射器を持つてゐる。

「二人とも菌が出ないから念の爲に血液検査
をするよ」

と云つて班長はその大きな注射器を調べて
ゐたが、間もなくKとHとを手傳はせて、私
の靜脈から血液をとり始めた。私は今まで病
らしい病をしたことがないので、こんな大き
な注射器を靜脈などへうつた例はない。見た
だけでぞつとした。

「痛さうだな」

と恐ろしさを笑ひに紛らして班長の顔色を
覗ふと

「何でも無い。見ないやうにしとけよ」

と淡々と答へて、KとHとが腕をしめつけ
て盛り上らせてゐる靜脈へ無造作につき刺し

た。痛いのは一寸の間だつたが、針が静脈の中へ深く入りこんで行く時は嫌な気がした。

三〇瓦ばかりとつて、

「この中から菌が出たら大変だ」

と輕輕に言つて班長は出て行つたが、また何となく不安な気が萌してきた。

午後になつたらK衛生兵が、重湯ばかりで身體が弱つてゐるから葡萄糖注射をうつよ、と云つてまた大きな注射器を持つて來た。嫌だなとは思つたが、身體の爲と諦めてしぶ／＼と腕をさし出した。今度は見てゐると氣持が悪いので、腕だけ出して目をつぶつてゐたが、ブスリと刺して血管をあちこち探してゐると思つたら、

「血管をはずれた。やり直した」

と言つてひきぬいた。

「やれ／＼、しつかり頼むよ」

失敗されては見ないわけにはゆかない。恐る／＼見てゐると、勢ひよく盛り上つてゐる靜脈へ刺しこんだ。

「よし、今度は大丈夫だ。痛かつたかい」

液を注入しながら人のいゝKは氣まり悪るさうな微笑をもらした。向ふからHに同じやりに注射をしてもらつてゐるMさんが

「案外弱蟲だね」

とからかふ。

「そんなことでは食鹽注射はともうてないね」

「だつて始めてだからさ。もう平氣だよ」

子供らしく抗辯する。K衛生兵は注射器を弄びながら笑つてゐたが、

「痛いめに合はしたから御馳走してあげるかね」

と云つて躍りながら出て行つた。間もなく

重湯と水飴の罐を持つて來た。

「水飴がなくなつたらまたもらつて上げるよ」

と

設備も充分でない僻道の野戦病院で、水飴など食べられやうとは夢想だになかつた。

皇軍のゆきとゞいた配慮に感謝すると共に、

K衛生兵の親切が有難く感じられて、思はずすみませんと口籠つた。

「いや、K軍醫殿にさう云はれたからさ」

とK衛生兵はあつさりと言へて去つた。

夕方、隊から慰問袋と手紙とがとゞけられた。慰問袋は東京のHさんからで、手紙は妻と友人とからであつた。

急いで妻からの手紙の封を切つたら、上の子が風邪でやすんでゐて困つてゐるが、もう癒りかけてゐるから心配しないやりに、それから忙しいだらうが、もう少し頻繁にお便りをよこしてほしい、便りが一寸でもと切れると負傷したのではなからうか、病氣ではないだらうかと氣がもめる、と大體こんなことが書いてあつた。

留守を護る者にとつては戦地からの便りがどんなに待遠しいことだらう。何かにつけて心細い思ひで暮してゐる妻や子供達に少しでも心配かけないやりに、寸暇を見出しては暗いランプの下で便りを出来るだけ書き送つてゐたが、病氣になつてからは一度も出さない。出したくていらいらしてゐるが書けないのだ。隊附の衛生兵が昨日も代筆で病氣だと知

らせておかうかと親切に言つてくれたが、なまじ病氣だなんて知らせたら、かへつて心配をまさせるのみだらうと思つて断つた。然しこのまゝ便りを出さねば一ヶ月餘りも途絶へてゐるから、疑心暗鬼して案じるだらうし、病氣で入院してゐると知らせたら、入院の文字に一入心を痛めるだらう。それかといつて討伐に出かけるので暫く手紙は出せないと思つたら、若しものことがありはしないかと毎日をおど／＼しながら過すだらう。どんな方法をとつても心配させることに變りはない。要の手紙をひつくりかへしてはどうしようかと、暫く思ひ悩んでゐたが、全く困つてしまつた。

どうしても心配するのなら書けないのを幸にしてよくなるまで便りを出さないことにしよう、と決心したのはよつぽ後のことだつた。さう決心がつくと、今度は日さんから届いた封筒袋が目についてしかたがない。何が入つてゐるだらうか、いまの症狀では何にも食べられないことはよく承知してゐるのに

一刻も早く開けたくてならない。だあい身體を起して震へる手で袋を解き始めたが、嬉しさで胸は一ぱいだ。子供が何が出てくるだらうかと土産物を目をまるくして窺めるやうに、袋の中を覗きこんだ。懐しい内地の香りが袋の中から匂つて來た。焼海苔が鑑詰が煙草が便箋が、その他日用品が躍り出て來た。喜びでおの／＼手に一つ／＼を丹念にとり上げては見とれてゐたが、煙草はきれてゐる時だつたので格別嬉しかつた。しかもどつさり入つてゐたからKとHとに二箇づゝやつて喜びを頒ちあつた。

夕方からまた熱が上り始めたが、夕食前には三十九度あつた。K衛生兵が氷枕の水をとりかへてくれたので、それに頭をピッタリつけて目をつむつてゐたら、うと／＼とねむつたらしい。やゝ暫くして尿意のために目が覺めた。起き上つて便所に行かうとしたら、くらくらと目まひがして倒れさうになつた。熱がぐんと上つたらしい。よろめきながら暗闇の中を手探りで這ふやうにして行つて來たが

身體は燃えてゐるやうに熱い。深更らしく衛生兵もやすんでゐるのであらう、人氣はさらない。氷枕は温くなつてゐる。一寸でも立つておれないが、やつとの思ひで轉びながら病棟の入口にある雨水の溜つてゐる水甕に辿りついて氷枕の水をとりかへた。生温い腐りかけてゐる水ではあるが、湯のやうな氷枕の水よりはましだ。いくらかでも冷してくれらだらう。

柄杓のやうな洒落たものはなく、鑑詰の空甕で汲みあげたのでなか／＼時間がとれた。抱きかゝへて寢臺に歸つて來た時は、精魂つきはてゝくずおれてしまつた。毛布をかける氣力もない。いやどうすればいいのかさへ解らないのだ。たゞぐつたりと死んだやうになつて横になつてしまつた。

四月四日

けたゝましい銃聲に目を覺まされた。小銃の鋭い唸りが絶え間なく響き、豆をいるやうな輕機銃のすさまじい音が間歇的に激しく聞えてくる。



敵の夜襲らしい。

増援に出かける兵隊の
軍靴の音も急調子に響い
てくる。間もなく野砲ら
しい砲聲が小銃や輕機
銃聲をおさへて轟然とと
ころき始めた。

「友軍のかな、大部隊の
襲撃らしいぞ」

Mさんがランプをつけ
た。砲聲を判断しようと
頭を擡げて耳をたてゝゐ
る。その瞬間にドーンと
大きな砲聲と共に病室が
かなりふるへた。

「友軍の野砲だ。この病
院のすぐ近くでうつてゐ
るらしい」

ひとしきり砲口は一齊
に猛然と吠たてた。

「三時だ、支那兵もなか

なかやるわい」

出征以來既に一年有半、中敵支の數十度の
戦闘に参加して、赫々たる戦績を有してゐる
Mさんは脾肉の感に堪へないのか、頻りに獨
語してゐたが、

「おい、起きてゐるかね」

と私に呼びかけた。

「起きてゐますとも、情なくてねむれるもん
ですか」

「全くだ、病に倒れてゐるとね……」

「戦友に對するすまない氣持で一ばいす」
ヒュツと空氣を強く切つた鋭い音がしたと
思つたら、ガチリと向ふの病室の屋根に異様
な音が上つた。敵の小銃弾が瓦に命中したの
だ。續いて二發、三發。

「敵はよほど近くにゐるらしい。しかもなか
なか頑強だね」

銃聲は少しも衰へない。野砲も未だ鳴りを
鎮めない。K衛生兵が衣をひっかけながら這
入つて來た。

「折角のねむりを妨げやがつた。生意氣に夜

「戦の眞似なんかしやがつて」

「夜襲の眞似とはよく云つたね。だが、彈丸が恐ろしくてねむれないんじゃないかね」

Mさんがからかふ。Kが來ると何時も賑やかになる。飄忽な身振りを以て戯談を云つたりからかつたりする。淋しい病人を慰めてやりたい彼の美しい心根がさうさせるのだが、私達もそれに調子づいて彼には遠慮のない戯談を浴びせかける。

「戯談じやないよ。衛生兵だつて支那兵の彈丸なんか恐くあるもんか」

どんな冗談を云つても、Kはにこにこ笑つて聞き流す好人物だが、この時だけはむつとしたらしい。圓い温順しい顔がこぼつて、口がへの字にきりりと硬く結ばれた。實際、冗談にしては言葉がひどすぎた。戦闘に關する限り兵隊は眞剣で戯談を許さない。しかも卑怯のやうにからかはれると、どんな兵隊でもかんかんに怒つてしまふ。白々しい空氣が流れて氣まづくなつた。Mさんは當惑して黙つてゐる。

「これは思かつた。何時ものやうにからかつたつもりだつたが……」

暫くたつて、Mさんが心からすまないと思つたのか、言ひにくさうにこれだけをやつと言つた。

「いや何でもないよ。然し彈丸が恐いなんてことは兵隊にとつては致命傷だからね」

氣まづい思ひにたえかねないのだらう、Kはこんどは強て笑ひながら答へた、それで白々しい空氣は一時に消えた。兵隊の心理はさつぱりしたものだ。感情の鮮立なんぞすぐ解消さしてしまふ。それと云ふのも敵に對してゐるんだから、味方同志の私的いざこざに長くとらはれてゐることが、耐えがたい苦痛に感じられるからだ。

「Mさん寢ようよ」

「やすもちかね、ほんとに思かつたな」

Kは出て行つた。Mさんはラングを消した。銃聲は少し衰へたが、時々迫撃砲らしい間のびのした砲聲が聞える。

私はさつきから悔恨の情にせめられて悶へ

苦しんでゐた。親しい戦友達が敵の彈丸を浴

びながら眞闇な中を馳驅してゐると思ふと、

病でベツトに横たはつてゐる我身が情なく思はれて、不覺の念が惻々として胸をうつ。な

んで病氣などしたんだらう。一人やすめばそれだけ戦友の勞苦はますのだ。しかも、小數

の兵力で何時も大部隊と戦ふ我軍だ、一人でも餘計に欲しい我が部隊だ。すまない。すま

ない。どうして病氣などしたんだらう。胸の中が熱くなつて何か一ぱい充ちひろがつた。

そしてそれが胸から咽喉もとへぐーつと上つてきたら、臉から熱い涙がほろりとこぼれた。

一滴の涙は急に多くの涙をさそつた。涙は頬を傳つて後から後からと流れ落ちる。私は聲をかみ殺して泣いて泣いて泣き續けた。枕がしつとり濡れてゆく。

——あゝ、敵の迫撃砲でもこの病室に命中してくれないかな、そして一思ひに戦死した方がよつぽどましだ——。

銃聲はもう殆んど聞えなくなつた。時々ボーンとうつろに響く小銃の音の外は何にも聞

えない。夜のしどろまがまた徐々に忍びよつて来た。激しい戦ひの後だけあつて、沈みたる夜氣が一きわ身にしみる。

涙に洗はれた眼はきらきらと輝き、神氣は澄みきつてゐる。深く沈んだ静寂は狂るはしい惱みを抑へはしたが、胸の奥底にはまだ焦燥の念がくすぶつてゐて淡い感傷をそゝる。刻みつけられた胸の傷手はなか／＼消えやうともしない。

幾何の時間が経つたのだらうか、長い間、何にも考へないで仰臥したまゝ闇の中を凝視してゐた。

遠くで野犬がしきりに吠える。屍をあさつてでもゐるのだらう。

暫くたつて、勇ましい軍靴の響きが遠くから波の音のやうに聞えて来た。近づくに従つて次第に調子正しくなつてくる。友軍が歸つて来たのだ。堂々たる歩武、力強い軍靴の音、何事もなかつたやうに音楽的に高らかに響いてくる。

何と發刺たる響きであらう。そしてその中

から生命の生々した躍動が如實に傳つてくる。じつと聞きほれてゐたが、心が次第に浮つとはずんできた。涙に曇らされて沈みきつてゐた暗い心が明るく晴れてきた。

そしてそれと共に新らしい意欲がはつきりと形作られた。

即ち如實に傳つてくる生命の躍動が、今迄抱いてゐた病氣に對する消極的な考へ方を、生命に關する否定的な意欲をたゞきつぷしてしまつて、生への執着がむらむらと湧いて来た。烈々と燃えさかつて来た。(病氣で働けないのをほんとに情ないと思ふなら、病氣を克服することに努力するのが本當ではないか、そうして、たゞ自己を輕蔑して安易な感傷的な涙にくれたことが、なんと女々しい性根であつたかに氣付いた。病床生活の無爲をとり戻す爲に人に倍する働きをしなければならぬのだ。國のために働ける貴い命なのだ。病氣に負けてなるものか。明日への奮闘に希望を持て。この覺悟こそ戦友への最も立派なはなむけではないか。立派な働きをする

迄はおめ／＼死ねるものか)

生命の貴さがこの時ほど心から納得されたことはない。

生命への執着をこの時ほど強烈に感じたことはない。

夜が明けたのだらう。扉からほのかな光がつゞましく流れこんで来た。

何と淨らかな光だらう。やはらかく私の身體をつゞんでくれたが、身體が聖化されたやうに思はれた。

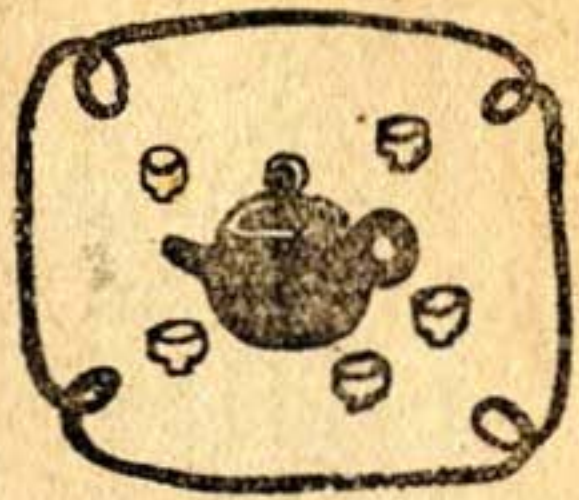
八時頃、今曉の戦場に傷ついた勇士が〇〇名入院して来た。重傷者も二三あるらしく衛生兵が搬架をかついで出て行つた。

貴い犠牲者に心からなる敬意を表したが、もう女々しい感傷的な涙は出なかつた。むしろ、支那兵に對する憎惡の念が湧いてきて、今に仇をとつてやるぞ、と激しい勇猛心にな

けりたつのだつた。

陽は熾々と降つてゐる。

新らしく見直された生命を祝福するかのやうに。



阪根翁のこと

吉田 絃二郎

阪根翁がその一生の間に、寺院のために盡された數は夥しいものである。中でも西光寺、知恩院、法然院、轉輪寺、圓通寺、安樂寺等の復興を完成したことは、翁の献身的な行爲として永久に忘れることのできないものである。翁は八十年の生涯を通じて數限りもない善根を積まれたが、殊にその寺院のために盡された仕事は、何と

いつても翁の一生の事業の中心をなしてゐる。その數々の寺院の復興の中でもとりわけて記憶せらるべきものは泉谷西壽寺の復興である。

明治の初めころ日本中に吹き荒んだ廢佛毀釋の狂風は由緒深い名利泉谷の西壽寺にも無殘な打撃をあたへた。當時西壽寺の住職であつた賢良師は當代稀に見る傑僧

で、學問も深く、見識も持つてゐた。しかしあまり鋭く才智が働くせいか、佛教の前途に對して見極めをつけてしまふたものか、廢佛毀釋の風潮を見るや、政府の役人達の先手を打つて自ら西壽寺を廢寺にしてしまつた。當時の役人等と來てはたゞ虎の威を借る底の俗吏が多く、あたらし寺古利の廊下を泥靴のまゝ歩いたといふ状態であつた。

中にはもつたない話であるが、石の地藏様を邸内に運んで來て沓脱に使つたといふやうな役人もあつた。

賢良師は恐らくかういふ時代の大勢を快しと思つたものか、ともかく名利西壽寺を廢寺にしてしまつた。そして自分は寺を捨て、東京に出かけて行つた。その途上

賢良師は參州の高徳志運律師を訪ねて、佛教の將來について意見を述べた。賢良師はそのところすでにキリスト教についても深い造詣を持つてゐた。「學問的に見てキリスト教はその深さに於いて佛教に匹敵することはできない。だからその點に於いてはキリスト教は恐るゝに足らぬ。たゞキリスト教は世界的な關係、組織を持つてゐるので、將來何としてもキリスト教はわが宗教界を支配するであらう」といふやうな意見を述べた。

志運律師はそれに對して「佛教は決して滅びない。宗教の興廢は組織にはない。たゞ僧侶自身の精進、努力に在る。佛教界に立派な人物が出で、立派な信仰の人が生まれるれば、佛教は興る。佛教の興廢は一人一人の僧侶自身の責任に在る。」といふやうな意見を述べられた。

賢良師は東京に出て、駿河臺のニコライ堂に入つて先づ外國語を研究した。外國語を研究したのはやがてアメリカに渡つて、西洋の文物を研めるつもりであつた。ところが未だ三十歳にも届かぬ壯年で、世を去つてしまつた。

さてこの賢良師を最後として西壽寺は荒れ果てゝしま

つた。何とかしてこのゆかりの深い西壽寺を復興して昔に還したいと念じたのが阪根翁であつた。

當時阪根翁は亡くなられた養父の負債のために日夜骨身を惜します働いてをられたところであつた。

家に巨萬の富を積んで後に宮寺のために盡す人はあるが、自分自身借金に苦しんでゐるさなかに寺の復興に心を碎くといふことは常人には想像もできないことである。阪根翁の眞の姿は西壽寺復興に於いて一番よく見出されるといふのはこれがためである。

そのころ阪根翁は家に歸つても草鞋を解かず、上り框に腰を卸したまゝ御飯をいたゞいて、ふたゝび商ひに出かけるといふやうな働き振りであつたが、それにもかゝはらず、毎日一里半もへだてた西壽寺まで出かけて行つて、復興の相談にあづかつたり、官廳への歎願等に全力を盡した。監督官廳では西壽寺復興のことは幾十度歎願書を提出しても、「願之儀聽届け難し」一點張りで、願書を却下して來た。この歎願の目的を達するといふ一事のために数年の日月を費さなければならなかつた。

しかし、いろいろの困難はあつたが、翁の永い歲月の

苦心の結果、泉谷の西壽寺は見事に復興することができた。同時に淨域内に阿育王塔と釋尊降誕二千六百年の紀念碑も建設された。

志運律師は年々三河から西壽寺に來られて説教をなされたが、最初の折は集まる者わづかに三人であつたといふやうなこともあつたが、阪根翁の盡力、志運律師のお骨折で數年後には集つて來る人もなか／＼多くなつて來た。

この西壽寺が今日のやうになつたについて、なほ一人あづかつて力のある人がある。それは諦眞尼である。諦眞尼といふ人はこれ亦世に稀なる信仰の人で、まことに傑出した近代の尼僧であつた。

阪根翁はこの諦眞尼のために、せめて狭い座敷でも拵へて上げようと考へられた。尼は老年になつても自分の部屋といふものを持つてゐなかつたからである。

尼は最初は「わたしには自分の部屋などいりませぬ」と固辭してゐたが、たうとう阪根翁の親切に敗けて座敷を建てゝもらふことになつた。阪根翁は名古屋の岡谷氏などにも金を出してもらひ、自分も相當の金を出して建

築に着手した。

そしてその棟上げの翌日阪根翁は靜かに病のために亡くなられた。

翁は西壽寺のために、その一生をさしげられた人であつた。しかも西壽寺の座敷の棟上げの翌日溘焉として世を去られたといふことも不思議な因縁である。

西壽寺と阪根翁とはまことに切つても切れぬ淨い因縁がある。

X

阪根翁の臨終の床に於いて翁はたゞ一度「苦しい」といふことを言はれたが、その他には決してそのやうな言葉は聽くことはできなかつたさうである。

病室にはべんといふ娘さんが侍してをられたさうであるが、病氣の性質上俯伏せになつて苦しんでをられる姿を見ては、臨終正念といふやうなことは到底斷念しなければならぬことであらうと思はれた。

翁の傍に念佛申してをられた大島臺下に向つて、娘さんは

「父は一生の間あれほど念佛を申してをられましたに、今日いよいよ臨終に際して、あのやうに突つ臥したまひ往生されるのでせうか」

と歎き訴へるといふ有様であつた。

ところがいよいよ臨終近くなると、今まで丸く背を曲げて俯伏し苦しんでゐた翁は、眞つ直ぐに病床の上に起き上り、いかにも安樂さうに合掌して念佛を申された。それはまことにやすらかな尊い大往生であつた。

×

家政女學校の資金を集められたところの話であるが、翁は夏のさかりの日中を歩いて寄附金をいたゞいて家に歸つて來ると、普通の人ならば先づ肌を脱ぎ汗を拭いて休息するであらうが、翁は家に入ると直ぐ佛壇の前に坐つて寄附の帳面を供へて念佛を申された。

その金額とても二十圓三十圓ぐらゐのものであるが、翁は心からありがたいと思つてをられた。次に翁はその日寄附をしてくれた人々の家の方角を向いて一つ一つ拜んでをられた。

翁の晩年の或る雪の日のことであつた。翁は近江の安土あたりの湖畔の寺まで出かけて言つて三十三ヶ所のお詣りをして來られた。

×

翁は六十歳のころすでに八十八ヶ所も三十三ヶ所もすましてをられたので、老年の翁が、しかも雪の日にわざわざ近江まで出かけて行つて重かけて行つて重ねて三十三ヶ所廻りをされるとをいぶかつてたづねたら翁は「いや、わたくしは子や孫たちのために重ねてお詣りをしたのでございます」と答へられた。

信仰坐談會新年會案内

一、日時 一月廿八日第四日曜午後一時より

一、場所 本郷區東片町七八橋本樂榮方美 容 大 學 院

電話小石川四九七六番

一、清興

福引 恐縮ですが一個宛御持参願ひます
餘興 會員の隠し藝
例年の通り賑やかに新年會を催したいと存じます。中村先生の「登山狀」の御講義のあとで、福引や余興など致し長閑な清興の一日を暮らすのは誠に意義深い事と思ひますどうぞ御誘ひ合はされて御來會の程を御願ひ致します

淨き友の會幹事

説 小

身替り名號

佐賀一海

鈴木金平畫



金

天竺のはじめと云ふから、豪者を極めた足利幕府が漸く熾熱の域を脱しかけた頃だ。駿州信長の今川義元・甲斐の武田信玄・尾張の織田などが、やがて来るべき世代のために、遙かに天の一隅を睨んでその用意にをさく怠りない。何かなあわたらしい世の雲行に、上下生活の動搖の兆は被ふべくもない。

夏の一日、京の都に近い栗田の在で婆娑も衣も汗と埃でくしゃくになり、眼は開いてゐるのか瞑つてゐるのか分らぬ一人の年若い行脚僧が、所持品と云つたら二連の數珠を手にしたゞけで、十人ほどの村人達を集めて辻説法を行つてゐた。この僧は長い旅路によほど疲れてゐるのであらう、前跣みに立つてゐる兩脚が絶えずふるへて落ちつかない。ときどき息切れとも溜息ともつかぬ心細い仕草が洩れる、それに聲調が低く静かすぎて張りがない。そのうへ同じやうな事柄を何べんとなく繰り返す單調さと無表情の連續から、やがて聴手は一人去り二人去りして行つた。が、僧はそんなことに頓著なく話を止めようとは

しない。きつと彼には聴手のことなど、眼にも耳にも入つてゐなかつたにちがひない。

村人達にとつて坊さんの説法はめづらしいことではない。都の繁華に引換へて長年の困窮に癒め盡され通しの農家にとつては、宗教の説く福音が云はゞ唯一の慰め、現世憂苦からの避難所となつてゐる。だから坊さんのしやべることには誰もが耳を傾ける。いや佛教僧ばかりではない。近年は山伏その他の咒ひ師が次々と村々を廻り歩いて現世利益の法を説いてゐる。そして人々はさういふ説教や卜ひの中に自分の達の正しい現實の姿を窺まへようと血眼になつてゐた。

然しながら、けふのこの若い僧の話は老人の愚痴のやうに退屈で、聴きとり難いのだ。阿彌陀佛の信仰をすゝめてゐることだけは分るが眼前に幸運がひらけるぞと相手を存んで納得させるやうな迫力が些かもない。遂に聴手の入替りも見ずに僧ひとりが取残されることになつた。

村で愛嬌者と云はれてゐる小作の喜作が、いつもに似合はず沈みきつた顔で、腕組みしながらこゝへ來かゝつたのは、ちやうどかうしたときだ。ひとりで何やらしやべつてゐる。見ると自分と同じ年頃のきかない僧だ。喜作は木かげに足をとめると、暫く僧の様子を注視した。要れきつて、いかにも見すばらしい僧の姿だ。それを喜作はすぐ自分の身のうへに及ぼした。生れてからおよそ贅以外のものを身につけたことのない彼だつた。彼はその贅に馴染み、贅に平然と生活して

來た。しかしいまの彼は、病床で死に瀕してゐる老いた父親を看とらなければならぬので、つく／＼贅が厭になつてゐたのだつた。

この坊さんも自分のやうに貧乏だらうか、喜作の好氣心をそゝつたのはそれだ。

日が暮れかゝつてゐた。やがて僧は相手のない方に合掌をすませ、よろよろと二足三足うごいたかと思ふとそのまま道端の草のうへに蹲まつてしまつた。喜作は、つと人家の方に走つた。間もなく手捥杓に新しい水を湛へながら僧のところに戻つて來た。僧は、「忝い」と頷いてみせてさもうまさうに一息に飲んだ。そしてほつとしたやうに立つてゐる喜作を見あげると、はじめてにこりと笑つた。

「坊さんはどこから來たかね？」喜作は黙つてゐてはわるいと思つたのでから訊いた。

「武州。」と僧は答へた。が、悲しいことには關東は喜作にとつて縁なき衆生だつた。

「諸國行脚を念じてやがて一年になるが、修行不足のせゐるか、道心なきためか、一日食せぬと直ちにこの始末、だらしなくてはなあ。」僧は一杯の水で生氣を取戻したやうに喜作の相手になつた。

「けれど、何のために方々苦しんでお歩きになるのかね？」

「諸處に寺院建立を志してゐる。まだ二寺の念願を達しただけだ。これから都にのぼつて三年は勉強修行だ。」

喜作は少し考へこんだが、

「貧乏はわるいと思ふかね。」とおづおづ質問してみた。

「貧乏？ わしも見られるとほり無一物だ。わしには家さへない。」

「佛さまは？」まだ不安だったので重ねて訊いた。

「佛も貧乏だ。」

力強い僧の答へだつた。そして笑ひながら右手で懷中から折疊んだ白紙をさぐり出すと、僧は喜作に、「世の中にわるいものは何もない。」と云つて渡した。ぼんやり受取つた喜作が、それをどうしたらいいかと躊躇してゐると、

「開けてみなさい。わしの書いた名號が入つてゐる。邪魔になるものではないからうから、いつも懷に藏つて置くがよろしい。南無阿彌陀佛。」

喜作は僧にかう云はれると、べつだんそれを開けてみようとはせず、懷にしまひこんだ。飾り氣のない、正直さうな僧の言語態度が喜作にはめづらしかつた。風が出た。一日の勞苦をねぎらふやうに吹いて来る。やがて僧は、

「夏は夜路が甘露、甘露。」呟いたかと思ふと、立上つて喜作に一禮したまま、もう次の瞬間には何もかも忘れたやうに道を歩きだしてゐた。その仕草が急だつたので彼は、呆氣にとられた。のみならずその歩み方には今までのどこに潜んでゐたかと怪しまれる力強さが見える。ふたゝび聲をかけても無駄だ、と彼は思つた。

その晩、更けてから、喜作の家の破れた大戸を敲く者があつた。熱

にうかされて呻りつづけの父親がやつと寢靜まつて、さて草鞋づくりの夜業にかゝらうと土間に下り立つた喜作は、我名を呼ばれてはつとした。低い呼聲だつた。彼は突變に、

「誰だ？」と言葉を返した。すると、

「出て來う、話がある。」聞き覺えのある聲だつた。めづらしいことだと思ひながら、戸を開けて靜かに表に出た。手拭で顔を包んだ庄屋の伴の太郎が軒下にしよんぼり立つてゐる。

「わけがある、わけがある。」太郎はかう云ひながら喜作を促すやうに家の勝手にはまつた。月が明るい。溝川の向ふは藪である。その藪摺れの音も太郎には氣づかはれるらしい。二人は地べたに丸い影を落しながら跣んだ。

「他人の身代りを頼みたいのだ。」

少しどもつた云ひ方で、太郎の語るところはかうであつた。——自分

分は明日代官に吟味されることになつてゐる。それは城主に納むべき製作物の品不足についてのおとがめである。實を云へば自分が或悪者に欺されたことに起因するので、自分に不正があつたわけでない。然しその人間が既に逐電してしまつてゐるので、自分の正義を裏づけてくれる證人がない、それに庄屋の跡とりたる自分にもし罪人としての辱しめを受けるやうな場合があつたら、この土地全體の名折れとなつて、村民一同にどんな結果を持來さないとも限らない。それで逃亡した人間の身代りとなつて、自分の無罪のあかしを立ててもらひたいの

だ。その代償は喜作の望みにまかせる、病人の父親の面倒は責任をもつてする、どうか身を捨てて親孝行をしてはくれまいか。

喜作はこの太郎の申出に對して何と答へていいものか判断がつかなくつた。ただ自分などと身分のちがふ太郎からの頼みといふ事實が、その身代りのどんなものであるかを深く考へさせなかつた。そのうへそれが親孝行の行爲であるとしたら、決してわるいことでない——彼は父親が良薬をのんで、一日も早く元の身體になることばかりを胸にうかべてゐた。

「承知したら、あす早くわしの家まで来てくれよ、一生の願ひだ、必ず恩に着る。」

から太郎に促がされると、喜作はいやと云へなかつた。

「けど、どんな罪になるかな、ちつとばかりの鞭打ちなら我慢も出来るやうが、幾日もちに歸れんと困るが。」

その喜作の言葉を引つたくるやうに、太郎が答へた。

「案じるほどの罪ぢやない。大丈夫だとも。いゝか、親父さんには云ふなよ。」

喜作は頷いた。

喜作は他の罪人と一しよに伊豆國に流刑となつた。そこで幕府の役人の鞭下にあつて鑛山掘りの勞働に従つた。未明に起されて日暮まで芋粥と水ばかりで休みなくこき使はれた。然し勞働にならされて來た

彼の肉體の頑強さは、間もなくかうした苦役を苦役と思はなくなつた。彼は孜々として働いた。働き通した。働く以外に何も考へなかつたし、何の不平も起らなかつた。半年経つて彼は人夫頭になつた。も早故郷のことも念頭になかつた。

來て二年経つた。彼の實直は刑一年を減じられていよいよ釋放ときまつた。他日また惡を犯さぬやうにと、掟に従つて彼は額に一筋の焼銀の跡を印せられて構ひなしの身分となつたのである。

彼は額をかくした手拭と苦役で得た何がしの錢を身につけただけで故郷への道を辿つて行つた。雨風のほかは旅籠に泊らなかつた。他人と挨拶を交す煩しさが厭だつた。が、父親のことだけはだんだん彼

(四五頁より) 然しまあまあそんなことは氣にしない方がいいですよ。今の眞宗と淨土宗との問題の如き少くとも親鸞聖人は法然上人に絶對歸依して居たのであり自力他力の問題、一念多念の問題など正しく取扱つて居られますが、後世になつてから對立的な考へがもちあがつて來たやうです。「それよりも江南さん、さつきのあなたの問題は如何ですか。親鸞聖人が法然上人に念佛の結果をまかせ切つて居られたやうに、念佛の現證の得不得も、如來様におまかせして念佛して居れば、何時かは開かれる時が参りませう。決して自分の念佛では駄目だと云ふ御考へをお持ちになつてはならないと思ひます。自分の力で出来ることではないのですから。」云云

の腦裡に大きな影を増して行く。父親は黙して達者で自分を迎へるであらうか、父親は太郎の口添へで自分が罪人になつたことは知るまい。だが再會して自分の親の傷跡を見たら、——それがこの上もない心痛事だつた。人を怨むことを知らない喜作の心は、たゞたゞ自分の胸甲斐なさを憤るほかないのであつた。

美濃に入つて、もう故郷に近い。秋の收穫時で農夫が忙しい。喜作は街道の松の根つこに腰を下ろして、きれいに刈られゆく稻田の風景にうつとりしてゐた。爽やかで、暖かい日の光だ。ふと

氣がつくと、自分の肩に手をかけた者がある。少し睡んでゐたにちがひない。彼は眼をあげてその者を見定めようとしたが、そのまへに、

「水をくれた御仁ではないか。」と澄みわたつた聲が響いて來た。

瞬間、喜作はたじろいた。笠こそ被つてゐるが、金襴の五條に紫衣をまと



ひ、水晶の珠數を手にかけて姿は單なる旅僧とは思はれない。が、彼の記憶が浮びあがつた。

「村で會つた坊さんかな。」喜作はなつかしさうに聲を出した。僧はうなづいて、彼の傍に腰を下ろした。

「あの時のお禮を申したい。」

「何の。」云ひかけた喜作は、はつとした。あのとときの坊さんは見すばらしかつた。丁度今の自分の姿のやうに。しかし今の坊さんは、まるで姿が違ふ——彼はほんと

りに僧があのと時の僧だつたのか、改めておそろおそろと注視しだした。それに氣づく僧は、「このあたりの施主に招かれて都から法を説きに來たのだ。まだ四五日はあるやう。わしはあれからずつと都で學をはげんでゐた。」

打説けた云ひ方だつた。

喜作は然し固くなつた。

「あんたも旅で修行なすつたやうだが、わしの修行よ

り上かも知れん。しかし互に死ぬまで修行だ。ときに、あの時わしの差上げた名號を稱へたことがあつたかな。」

喜作はその名號を何のこ
となくお守札と思つて、伊
豆にあつた間中もずつと肌
身離さずつけてゐたのだつ
たが、まだ開いてみたこと
もなかつた。

「稱へたことはないの
す。いまでも懷にはありま
すが、實を申すと忘れてゐ
たんです。」彼が云ふと、

「それでいい。」かう云つた儘僧は笑つてみせた。が、すぐ眞顔に返つ
た僧は起ちあがると、

「わしの云ふのを眞似なさい、なむあみだぶつ。」

かう合掌して稱へた。殆ど反射的に、これも起ちあがりながら「な
むあみだぶつ」を口にした喜作に、

「貧乏は苦にならないだらう。父親のことは大丈夫安心するがいい。」



それにけふはいふことを教
へてあげる。その額の被り
ものをとつて鏡にうつして
見るがいい。」
僧は云ひすてて、喜作に
彫れをつげた。

喜作の額の傷跡はいつか
消えてゐた。彼の所持する
名號に、ちやど彼の額に印
せられたほどの大きさの傷
が引かれてあつた。彼はそ
の名號を一代の守本尊とし
て、また稱名念佛を怠らず
に家業を嗣んだことは云ふ

までもない。彼は後に栗田在の豪農に出世したが、たゞ彼に因縁のあ
つた武州出生の、都で學問をしたといふ僧に、三度會ふ機會の恵まれ
ずにしまつたことを深く悲しんだといふことだつた。

足利義輝から一心院の額字をおくられ、僅か四十二歳の華頂山入滅
までに精舎の草建、化他の専心に數多くの功績を後世に輝かしてゐる
縁譽稱念上人が、あの僧だつたことを、喜作は知らずじまひだつた。



想 隨

麻 三 斤

佐 藤 賢 順

「無門關」は「碧巖錄」其の他、禪門で重んずる語録とともに、私の好きな本の一つである。それは愛讀書などと言ふには、少し勿體ない氣がするほどで、寧ろ教を乞ふ本とでも言ふべきか、自分にとつては其の時々の心持の深さを計る準尺でもある。「無門關」には「如何なるかこれ佛」といふ公案が四つ提出されてゐる。それ／＼別那の答が興へられてゐるのであるが、いづれも面白い。ところがその答の意味が解らなかつたことがあるし、解つたと思つてゐても、其の理解が月日の経過するとともに次第に變つてくることがある。語録の面白

味はかういふところにある。理解が固定してしまつて動かなくなつたのでは、肝腎のこちらの心持の進みといふものは止まつてゐるのである。

「洞山三斤」といふ公案を取つてみよう。

洞山和尚が或るとき「如何なるかこれ佛」といふ問をかけられた。そして即座に「麻三斤」と答へた。そのとき洞山は庫裡で胡

麻を計つてゐたのだとも言はれてゐるが、佛なんかこんなものだ、たつた胡麻三斤だと答へた。麻は胡麻の意味ださうである。

ところで、この麻三斤といふ言葉そのものには別段の意味はない。碧巖錄で「槐樹

を指して柳樹を罵る」にも等しいと評してゐる通り、木に竹を接いだやうな答へである。實は何と答へてもよいところで、雪竇和尚が言つてゐる通り「花簇々」と答へても「錦簇々」と答へても、または「南地の竹」「北地の木」と答へてもよいところである。その表現そのものは何でもよいので、如何なる言葉を使はふとそれは説明ではなくて悟道の象徴に過ぎないのである。つまりふつくらと充實した心境が、一ヶ所で放つ閃光である。私達はその言葉を通して、深く廣い心境を覗くのである。宗教上の言語の表現性は、凡てかうした働きを持つもので、それは解釋や説明ではなくて象徴である、といふことを注意すべきである。もつと極端な場合を言へば、必ずしも言語による必要もない。微笑や、いや實に沈黙でさへも、かうした象徴的な表現性を持つてゐる。世尊が花を拈じて衆に示したら、迦葉尊者たゞ一人破顔微笑して世尊の微妙の法門を體解したといふ話や、維摩の一默、雷

の如しといふ話は餘りにも有名である。

禪家では佛などいふ言葉は口にするさへ汚はしいとされる。馬祖道一和尚に弟子の大梅がやはり「如何なるかこれ佛」と尋ねた。馬祖は「即心是佛」と答へた。この答も前に述べたと同様の象徴性を持つものだが、その意味は、私ども人間の心そのまゝが佛である、人間と佛との區別はない、この心に即くことそのまゝで佛である、といふことで、彼我相即し主觀客觀の對立を超越した悟道の絶對境を指してゐる點で、恐らく禪家としてはこれ以上の境地を示した言葉はないであらう。それなのに「無門關」の集録者無門和尚は、心ある者がこんな言葉を聞いたなら「三日も口を漱ぐ」だらう。「即心是佛」と説くを見れば、耳を掩ふて便ち走らん」と手きびしい評釋を加へてゐる。私どもが尊崇し合掌し禮拜する佛の、その名を聞いたただけでも汚はしいとは、何故であらうか。

人には悉く佛性がある。人は誰れでもこの佛性を開顯すれば佛になれる。人は佛に成れる、また佛に成らねばならぬ。これが禪家で言ふ見性成佛である。ところが、佛に成ると言へば、それは甚だ高く遠い目標であるかのやうに感じられずにはゐない。人がその佛性を開いて佛に成ると考へてゐる間は、人と佛とは一如ではなくて明瞭された二つの概念で、人と佛、主と客とは對立してゐて、人が人とは異なる他のものとしての佛に成る、といふやうに考へ勝ちである。馬祖が「即心是佛」と答へたのは、こゝの誤解を避けるためでもあり、見性成佛といふことに纏ひ勝ちな迷執を破して、そのことの眞の意味を徹底させて、心佛一如の妙境を示唆しようとしたのであらう。即心是佛は即心即佛である。もし佛を崇め尊ぶべきもの、人と異なるものとしてしまへば、人皆が誰れでも佛に成るなどいふことは、全く出来ないことになつてしまふであらう。

馬祖和尚はまた或る時「如何なるかこれ佛」と尋ねられて、今度は「非心非佛」と答へてゐる。先きには「即心是佛」と答へ今は「非心非佛」と答へたのである。先には肯定の道を取り今は否定の道を取つたまゝで、一見矛盾するかに見えるこの二つの答は實は同じ事態の表現である。肯定的な答が一層よく事態を表はす場合にはその道を取り、否定的な答がさやうである場合には否定の道を取つたといふまゝである。然し多くの場合、肯定的に答へて佛はかうである、あゝである、と言へば、それは事態を一層明瞭にすると同時に、狭く限定するといふ結果を免れない。あゝでもない、かうでもない、と言へば、明瞭にすることはできないまでも、限定や偏執の缺陷を脱して、事の眞相を暗示することはできる。そこで「非心非佛」と言つたのである。無門がこれを評して「もし者裏に向つて見得せば參學のこと畢らん」と言つたのも、この邊の消息を語るものであらう。



であるから洞山の麻三斤などは、また初步の階梯で、蛤がほんの少し腸を出してゐるやうに、僅かに眞理を示してゐるといふ意味から、はまぐり譚と呼ばれてゐる。それでさへも「いづれの處にか洞山を見ん」とその秀逸を賞されてゐる。

洞山の師、雲門が「如何なるかこれ佛」と尋ねられたときの答は更に驚拔である。雲門は吐き出すやうに「乾屎橛」と答へた。乾屎橛とは、それこそ「淨土」などの紙上で公に筆にするのも汚らしい言葉であるが、筆にしなければ意味が通じないから書くけれども、乾いた糞がきべらの事詳しいことは支那から歸つた人に聞いて下さるといふ。

然し氣分の誇張や陶酔や欺瞞なしに、人は心からさう信じてゐられるのであらうか。人はそのまま佛である、誰れでも修行によつて佛に成れる。そこに一抹の不安がないであらうか。若さや健康が産む自負、

教養や地位が興へる自負、そんなことを抜きにして、人間の眞の相を諦観するとき、人間の力はそれほど高く買はれるものであらうか。心佛一體であることに疑はない。がどこまでの難行を續けたらその理想が達成せられるのであらうか。心境の進みがこゝまできたといふ證明を興へてくれるものは何もない。佛などは口にするさへ汚らしい、我こそ佛ではないか、と悲壯にも近い意氣で、些かの不安もなしに、この人達

は邁進してゐるのであらうか。語録を讀むたびに私はそんな疑問を持つてゐた。支那の禪宗の歴史を讀んでみると、甚だ多くの人が、念佛に移つてゐる事實が、一層私の疑問を深めてゐた。所が近頃、禪家の中でも特に優れた或る方の語を讀いて、私は教へられるところ少くなかつたのである。『師家が提唱をして自分の部屋へ歸つてくると——提唱といふのは碧巖録や何かを講じて大に法螺を吹くことで、提唱のことを吹くといふがね、吹いて自分の部屋へ歸つ

てくると、何となく物足りないといふのが淋しいといふのかね、しきりにお經を讀む。普門品だの何だのを。これは自分の爲に讀むので、他人の爲に讀むのではない。私らは毎日朝晩は念佛を唱へてゐる。結局、南無阿彌陀佛になつてしまふんだね。本來なら南無釋迦牟尼佛と唱へるところだが、これはどうも語呂が悪くていけない。支那の禪宗の歴史を見ても、統計を取つたことはないが、恐らく全體の半數以上は念佛になつてゐるだらう。

私はこれを聞いて、驚てこれも亦、疑問に思つてゐた自力と他力との區別が全く單に相對的なものに過ぎないことを明らかにすることができ、また最も本質的なものが示されたのに氣着いて、落ち着く可き處へ落ち着いたやうな心持がしたのである。そして禪僧良寛の晩年の歌
草の庵にねてもさめてもまうすこと
なむあみだぶつなむあみだぶつ
を思ひ出したのである。



淨き友の會
信仰座談
念佛の現證は可能か？

江角氏「敬異鈔の中に、親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしとよき人のおほせを被りて信ずる外に別の子細なきなり。念佛は誠に淨土に生るゝ種にとやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされ參らせて念佛して地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候云々とあり、また彌陀の本願まことにおはしまさば釋尊の教説虚言なるべからず、佛説誠ににおはしまさば善導の御釋虚言したまふべからず、善導の御釋まことならば法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば親鸞が申すむね、またもて空しかるべからず候

かとありますが、親鸞聖人は唯だ法然聖人の御言葉を信じただけで、念佛そのものに對しては淨土に生るゝことが地獄に落ちることかの批判さへして居られないやうですが、是れでも念佛の信仰になつて居るのでせうか、どうも不思議に思はれてなりません——」
中村先生「信仰を立てる、道筋に「就人立信」と云ふのと「就行立信」と云ふのと二通りあると云はれて居ります。行に就て信を立てるのは諸行の中から念佛の一行を選んで如來に歸命して行くことですが、今親鸞聖人が法然聖人の教へに隨つて、徹底的に法然上人の仰しやることには決して間違ひないと深く信じて居ることを云はれたもの即ち「就人立

信」の方面の表明をなさつたものです。觀經疏の中にはたとへ何んな人が來て念佛は駄目だと云つても佛語に虚妄はないのだから決して信を捨ててはならない。假りに澤山な佛菩薩が來て念佛したつて淨土へは行けないぞと云はれても決して念佛は捨てられない。何となれば佛は一佛一切佛でもつて甲の佛と乙の佛と説を異にするには有り得ないから、若しそんなことを云ふ佛があつたら、それは本當の佛ではない。釋尊を信ずる限り決して釋尊が嘘を云はれたなどと疑ふ餘地がないのだから誰が何と云つても念佛は捨てられないと釋尊其人に就て信を立てることを云つて居ますが、親鸞聖人も敬異鈔でそれを云はれたのです。即ち彌陀の本願が誠だから釋尊が説かれたのであり、釋尊は決して偽りを云はれないのだから善導大師も觀經疏を作られたのであり、善導大師はまた決して心にもないそれを述べられたのではないのだから法然上人も亦決して嘘を云はれたのでない、かう思ふ時よし念佛が假りに地獄へ行く業であり種であ

つたとしても自分には何の後悔もないと、法然上人と云ふ人に就て信を立てられたことを強く云ひ現はされたものです。是は私達の日常生活の中に常に出て来ることで私達にも「誰それが云つたのだから決して間違ひない」と信ずる場合が多いやうに、人に就て信ずることは信に達する最も簡易な行き方でありませう。

江角氏「イヤそのことは私にも判つて居りますが、お尋ねした要點は親鸞聖人と云はれるやうな一宗を開いたえらいお方でも念佛に對する體驗を述べられて居らず、唯だ法然上人の言葉だけで信仰に入られたのであるとすれば、何だか念佛體驗を持つて居られなかつたのではないかとさへ思はれます。況して私のやうな拙ない凡夫が念佛して實證を得、佛を見たてまつると云ふやうな體驗の得られやう筈がないと思ひますが、其點をお伺ひしたいのです」

中村先生「眞宗では一念業成と云ふことを説いて信心を得た時、往生の業が成就して正

定業の位に入ると申して居りますから、親鸞聖人の内觀は知りませんが、大體に於て念佛實證と云ふことに重きを置いて居ないのではないかと思はれます。そして、その入信の喜びを常に思つてあとは御禮讃の念佛にいそしむのが建前ですから、もうそれ以上の要求はしないのではないかと思はれます。だからそれに就ては餘り云はれてないのかも知れません。

然し乍ら現代人はさう簡單に信仰に入れません。私なども實證しなければ承知が出来なかつた一人ですが、大體見佛と云ふことも色々で、私は之を感覺的・感情的・理智的と云ふやうに分けて居りますが、感覺的見佛即ちお木像のやうなお姿を拜むものであつても、若し單にそれだけで「聞法」即ち如來様の慈悲をシミジミと知り得なかつたら駄目であつて、佛を見奉る時慈悲を知り得て感情的自己の改造と社會への奉仕とへ意志的に志を起さねば本當に佛を見たとは云へないと思ひます。更には一種の悟りとも云

ひませうか眞理にめざめる理智的なものがあるつても然るべきだと存じます。それは夫れ夫れ教養の如何にもよりませうがね。

それ程まででなくとも、少くとも如來様の慈悲を感じ得るところに一分の見佛がある譯ですから、たとひ人間のやうなお姿を拜まなくても本當にお慈悲を知り得たなら、それも亦た見佛の一種に數へてよいと思ひます。

鑑西上人は「念佛とは不離佛・值遇佛の事である」と云つて居ますが、事實私達が念佛しますとき、遠方の如來様に南無して居るのでなく、目には見えなくとも、私達の眞正面に在す如來様に南無し歸命して居るのです。私達の上に覆ひかぶさつて居られる如來様に南無して居るのです。即ち佛と離れて居ないのであり佛に値遇して居る思ひである筈です。決して留守の如來様に南無して居るのではありません。また私達の思ひが届かない程の遠方の佛を想像して居るのではありません。また如來照鑑の下に仕事をして居ると思つて居ることは、法然上人の「念佛の中の仕事」

と云はれことの一分の意味だと思ひますが、
如來照鑑の下に日暮らしさせて頂いて居るこ
と即ち一分の見佛とも云へませう。また一々
に如來様の御恩寵の現はれと思つて、かの蓮
如上人が一枚の紙片をも頂いてふところに入
れたと云ふ如き、私達の目に觸れ身に觸るゝ
一つ／＼に如來様の御慈悲を見て居るものも
また一種の見佛と云へます。

このやうに見佛の體驗は信仰の上に色々の
形がある譯で、如來様の御姿は「無量相」で
ありますから形像だけが如來様のお姿ではな
く、無量の相の中に佛心を見る事が出來得ま
すれば、即ち其處に立派な「見佛」があつた
のだと思ひます。

また念佛中に佛を拜んだとか或は光明を拜
んだとか云ふ狹義の見佛にしても熱心に念佛
して居れば誰にでも出來得ることと思ひます
が、それもさうなりたと思ふ「有所得」の
氣持でなく、こちらとしては一切は如來様よ
り興へ給ふと云ふ信念の上に立つての念佛で
あるべきで、自分の申す念佛の力だと云ふや

うな、謂はゆる自力の心の失せ切れない念佛
では見佛體驗は出來ないと思ひます。そんな
事は一切合切如來様におまかせして、こちら
は唯だ如來様におすがりして居ればいゝので
す。如來様の方で適當にお導き下さるでせ
う。

藤井氏「よく半自力半他力と云ふことを申
しますが……」

中村先生「さうですね。眞宗の方から淨土
宗の方をさう云ひますが、一體世の中に半分
自力で半分他力と云ふことがあり得るでせう
か。自力と思つて居ることも實は他力なので
はないでせうか……」

瀧口氏「なぜそんな風に云つたものでせう
か。何うも餘り他宗のことを悪く云ふのは、
佛家に好感を興へないものですが、ことに日
蓮宗の御話しの如きは好感がもてません」

中村先生「拾遺古德傳でしたか眞宗側の法
然上人傳に信の座、行の座に別けた話が出て
居りますが、もと／＼信行具足でなければな
らぬものを特色をはつきりとして眞宗の方で

は信に重きを置き、淨土宗側では行に重きを
置いたので、兩方が少し偏り過ぎた傾向にな
つたやうです。そこでこの淨土宗が行に重き
を置き過ぎて居るところを「自力」と見たか
ら「信」の他力と「行」の自力と半々である
と思つた譯でせう。然し信のない行は空手形
見たやうなものであり、行のない信は口約束
見たやうなもので兩方とも駄目ではないでせ
うかね。だが夫れぞれ立場立場があつて見る
方向が異なれば、形が變つて見へる筈ですが
自分の立場だけを是とし他の立場を非とする
のでは何うも感心しませんね」

瀧口氏「淨土宗では他宗のことを悪く云は
ないやうですが、何故他の宗派は他宗を悪く
云ふのでせうか。何れもこれも釋尊の教へで
あつて見れば、夫れ／＼立場立場に於ての眞
理はあると思はれますが……」

藤井氏「天台宗などは餘り他を悪く云ひま
せんね」

中村先生「あとから出來た宗旨程他を悪く
云ふ傾向があるやうです。(三九頁へ續く)



威 耀 朗 十 方

【身邊に見る信仰の實話】

金 田 明 進

伊勢がへり

これは夜中の東海道上り列車内の見聞です。

フト氣がついて見ると向ふ側に兵隊さんが一人坐つて居て、その隣りの紳士と盛んに話をしてゐるやうです。と云つてもその兵隊さんはおとなしくその一紳士の激烈な口調の話に耳をかしてゐると云つてもよい形なのです。私もその紳士の高調な話に思はず耳を傾けますと、多

少感慨なき能はずでした。

「やあ、兵隊さんはこんど目出度く御歸還ですか」

「いや、戦傷の戦友を内地の病院へ送つて来たのです、それで明日は一寸原隊を訪れて又すぐ戦地へ戻るのです。」

「あゝさうですか、それは御苦勞さまです。しかし、兵隊さん、あなたがたが戦地で御苦勞なさつて、この内地、特に都會の有様を御覽になつてどう思はれますか。實は憤慨なさりやしませんか。

んか、京阪もさうだと思ひます

が、東京を御覽になると尙更です。この國を擧げての大戦争だと云ふのに、東京の人間たちは

戦地の兵隊さんのことなど考へてゐない様子ですよ。まあ、あの銀座あたりを歩いて御覽なさい。お白粉をぬつた、ケバクした装の奴等がのんきさうに酒をのんだり、買物したりして歩いてゐますよ、活動でも芝居でも、いつも満員です、實にあきれたものですよ。軍需工業で少

しばかり景氣がよいとて、カフェーや料理屋が大賑ひだと云ひますよ、私はあなたの方兵隊さんを見るたびに、東京の奴等の氣がしれないと思つて憤慨するんですよ、まあ兵隊さん、あの東京をよく見てごらんさい……」

こんな話が私の胸を激しくついたのでありました。あとは色々なことを、この紳士なる人は兵隊さんに話したでせうが、私の耳には、こんな言葉だけが實に情なくのこつたのでした。

ところが、この紳士はいつの間にかどこかの驛で下車したらしいのです。そして、こんどこの兵隊さんとのやさしい會話が又私の耳を訪れてきました。會話の相手はと見ると、やはりさつきから兵隊さんたちの前に座席してゐた少女をつれた丸髷の

中老の江戸つ子らしい小母さんです。小母さんの口調はさつき下車した紳士の話がいかにも残念らしいやうです。

「兵隊さん、ほんとうに御苦勞さまです。實は私はこの孫が六年生なので學校から伊勢神宮參拜に參つた歸りなのです。しかし只今兵隊さんにお話なさつてみた方の、あのお話、どうお聞ですかしれませんが、あんなこと全くウソですよ、それはそれは萬人の中には少しばかりの心得違ひの人はあるかしれません。しかし、私も東京に住まつてゐて知つてゐますが、戦地の兵隊さんの御苦勞を忘れて遊んで歩いてゐるなんて人は一人も見當りませんよ、私の町などでもこんな私等

の女までが町内から兵隊さんが出征なさるとか、入營なさると云ふときは、どんな早い朝でも遅い晩でも、みんなそろつて、



お見送りをいたしてゐます。誰しも彼も、戦地の兵隊さんを思へば何でもないと思ふで出て参ります。そして毎月かゝさず慰問文や慰問袋を集めてお送りした

り、出征家族を慰問したり、みんなまごころこめてやつてゐるのです。この間も防空演習がありました、それは一生けんめい

でした。こんど婦人班もとても團結して働いたのです。私のやな年寄でさへ防空演習中は夜でもモンペイをはいて寝み、いざといふときは夜中でも飛びだして演習に加つた位ひです。ほんとに銃後の東京は一生けんめいです、

さつきの男の方がずるぶん兵隊さんに東京のだらしないこと申上げたやうですが、私はあのお話をきいて残念で残念で涙がこぼれました。あんなこと、東京をほんとうに知らない方のお話です、兵隊さん

があんなお話をきいて戦地におかへりになつて、戦友の方達にそのまゝお傳へ下さつてはただ間違ひだと思つて、私ほんとうに心から申上げるのです。東京にはあんなお話のやうな不心得ものは一人も居ないと申上げてよいと思ひます……」

「いや小母さん、ありがたう。内地にかへつて來ると銃後の話をいろんな人からきかされますよ、けつして一人の人の話が本當だと思つてゐませんよ、僕達にはほんとうに小母さんのやうな心持ちで國民が銃後を守つてくれるのだと信じてゐるために心強く戦つてゐるのです。ありがたう、ありがたう。僕戦地へかへつたらよく小母さんの心持ちを傳へますよ……」
この會話をきいて私は、あつ

い涙がこぼれるのでした。その小母さんもハンケチで眼をおさへて話してゐました。兵隊さんも泣いてゐたやうです。なんて美しい會話だらう、先の紳士の話と思ひ比べて、私の胸は一杯にこみあげるものがありました。

戦地からの兵隊さんに對し、なほ一人たりともあの紳士ごとき銃後の報告をするものがある限り、事變處理に暗きかげがさすのではないでせうか。まごころから兵隊さんを思ひ、眞心から銃後のつとめに盡す國民なればたれかこの小母さんの涙の報告に明るき新秩序建設への光りを見出さずにはゐられませうか。

威耀朗十方

この十一月ほど私にとつて多

くの方々を大陸へお見送りしたことはありませんでした。前號誌上にもありましたやうに、私は中村辨康先生や藤井實應先生と共にこの月は奥澤の九品佛の信行道場で若き宗侶たちと修行して居りました。修行僧はみんな十四年の春大學専門學校卒業者でしたので大半は間近に入營の日をひかへてゐる人達でした。それで十二月一日入營の人が五人もあつたので、一々その歸郷を東京驛頭にお送りしました。元氣な道場生に日の丸の大旗を振りつゝ歌ひつ送られる入營者の顔は喜びにあふれてゐました。

この道場生たちが一夜、椎尾先生を圍んで坐談會を催しましたとき、一名の道場生が「われわれはみなこれから入營しておそらく戦地に赴くのであります

が淨土宗侶たるわれわれの聖戰に參する心得の要は……」と賀されましたとき、椎尾先生は固くむすんだ唇を開かれて、「念佛申し申し參戰することです、露營のときも、行軍のときも、突撃のときも、たえず念佛申し進軍すればよろしい」と簡明に答へられました。おそれくこの一問一答は永く道場生たちの胸に留ることとせう。

かうした修道者の人々から毎日のやうに私たちは日の丸の御旗にサインを頼まれました。中村先生は「不惜身命」とか「海ゆかば」の歌などを多く書き與へられたやうでした。私は幾度か首をひねつて、書くべき文句もなくたゞ自分の名前だけをかくのが常でした。かうして日の丸の御旗にサインしつゝ日を過して十一月廿六日には涙の念佛の中に感慨深き第一回信行道場を閉ぢ、四十名の若き同行の宗侶と、否やがて聖戰に參すべき若き勇士らと袂を別ちました。

その同じ二十六日の夜、私は永年郷土の先覺者として、又郷土の大先輩として指導を受けて來た齋藤典察先生を東京驛頭にお見送りせねばなりませんでした。

齋藤先生は茨城の鐵仰會山王村支部を盛り立て指導して下さつた方であり、地方教化教育及社會事業の第一線に活躍されてゐた方ですが、こんど北支の開教主任に就任され、地方に於ける一切の活動を後進に委ねて、この夜北京に出發せられたのでした。茨城の鐵仰運動にこれほどうれしいことはありませんで

した。本會の里見會長先生、江藤先生を始め見送りの大勢と萬歳の聲もろともに、齋藤先生の北支に於ける活躍を念じてお別れしました。

ところが、この齋藤先生が多年經營されてゐる育英學舎中學といふのがあつて、先生も北支行きを決心されるまでに随分この中學について御苦心されたのですが、幸ひ御弟子の下村幸典君等に學校のこと萬事托されたのでした。しかるにその下村君が十八日突如召集をうけられ先生に一足おくれて三十日に應召、住職地を出發されることとなり、私は常總線守谷驛に群る歡送の町民と共に心からの見送りをしたのでした。そのときフト私の眼に強くと

まつたのが下村君のかけてゐる赤帶です。背中の方には「祈武運長久」と普通にあります。胸の方には達筆で「威耀朗十方」



間根山さんは齋藤先生の指導のもとにまことに熱心なお念佛の修行者であり、地方の篤信家であり、書道では林祖洞門下の逸材です。この人にして

このことありと今更ながら私は畏敬の念にうたれつゝ、その尊き心のこもれる赤帶をかけて出てゆく下村君を祝福せずにはゐられませんでした。

「威耀十方に朗かなり」と口ずさむとき、私が道場生の多くから、毎日のやうに、日の丸にサインを求められ、何か一句か

きたい、しかも、淨土教的な出征者をはげますに適はしい一句を……と首をひねりつゝ果さなかつたその一句、それは「これだ！」と氣づかされるのでした。佛説

無量壽經四誓の偈の一句、日毎に口づさみつゝ、魂なきためか讀みすてにせしこの一句、もつたいたないことだ、こんな生々した、出征勇士を送るに適はしき佛語かと、私はたゞ、その聖語にかぎりなき感激を覺えるのでした。私は六十日來求めに求めた法の一句を今こゝに興へられた歡喜を味ひつゝ、下村君の壯途を祝福するのでした。

そして私は來週から一週に二日つゝ齋藤先生や下村君のお留守をつとめるために、その中學の教壇に立つことになつてゐます。このめぐまれた感激の法句を深く味ひつゝ、大陸にお送りした多くの師のあとを、友のあとを、私は自らにむちうつて護つてゆきたいと、心ひそかに誓つたことでした。(一四、一二、三)

日	月	山	川	火
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔

(カフツは象形文字の代表的なもの)

(一)

人類が地球上に發生して自分の意志を傳へる爲めに言葉を生じ、その言葉を相手に見せたり記録したりする文字が必要となりました。そして何萬年か何千年かを經て今日の様に各國各人種各々異なる文字が出来上りました。今東洋の文字特に支那人及び日本人が使用してをる文字即ち漢字なるものを考へて見ると、なか／＼面白いものです。支那で昔から傳へられてをる通り、漢

『書と云ふもの』

赤尾雪嶺

字が出来上るのに、六つの方法や規則がありました。之を六書と稱して、此の六書を研究するのに一の獨立した學問が存在してをる程であります。六書とは象形・指事・會意・諧聲・轉注・假借であります。先づ簡單に之を説明して見ませう。

第一に象形と云ふのは物の形をそのまま寫して文字としたもので、日月山目車竹などが皆それであり、支那の大昔の殷墟文字とか獸骨文とか、篆書などを見ますとよくわかりますが現在の文字は其が次第に變化したものです。上に掲げた圖を御覽に

なると一目におわかりの事と思ひます。その次に指事と云ふのは、象形によつて出来上つた文字を動かしたり合せたり増減したりする事によつて意義を示して出来上つたものです。即ち白は太陽の光線の白く上に放射したもので日を變化させて白いと云ふ意味を示してゐます。夕と云ふ字は月が夕方になると出るものですから月の一畫を減じて夕方の義としたものです、王と云ふ字は天地人の三をつらぬいて三德を具備したものの即ち帝王の意味であります。

第三に會意とは、既に意義が出来上つてをる文字を二個以上結合して新しい意義を

表す方法で、此の方法の内にも色々あるのですが、例せば、東と云ふ字は日と木との結合であり、日が木の中程に懸つた形で、その方角をひがしとしたものです、明は日と月の合字であきらかの意、閉はとちた門のすきまから月光の漏れた形であり門の間の義を示します、名と云ふ字は夕と口の合字で太古未開の時代には燈火がなかつた爲夕方になつて暗くなるとお互の顔が見えなくなるから各々自分の名を名乗つてから言葉交しました、其故に名と口とを合せて自分の名を呼ぶ義となり後には一般に物の名稱となりました。又臭と云ふ字は自と犬の結合したもので、自は鼻の形象で古代には鼻と云ふ字を自と書きました、犬の鼻は臭を嗅ぎわけけるのに敏感であるから犬と鼻の合字、即ちにはひの義を生じたのです。集は木の上に鳥の集つた形で古代では佳三つの下に木と云ふ字を用ひてゐます。栗は木の上に栗の實の成つた形であり、西は西ではなく栗の實の形であります。古い文

字では木の上に西を三つ書きます。

第四に諧聲とは二つの文字が結合してその一つだけはその意味を表しますが他の一つはその字の音を表す音符の役をしてゐるものです。此の方法の内にも幾種かの分類があるのですが、例せば江河海などは皆三水扇であるから水に關係があるもので、工可毎はそれぞれの音符であつて、それを附随させて江河海などの聲音を區別して意味を表してゐます。額頭顙頂なども同じであります、頁は人の頭の象形で此等の字は皆頭に關係がある文字であるわけです。客豆豉丁は皆その音を示す役目をしてをります。忍志忘悲なども皆心に關する字であります。双土亡非はその音符であります。

第五に轉注とは轉回流注の事で、本來その字がもつてをる意味を轉じて他の物に流用する場合であります。例せば樂と云ふ字は本來は樂器の形象で音樂を聞けば心がたのしむので即ち快樂の意味に流用したのです。又快樂は人の欲する所であるから好む

願ふと云ふ意味にも用ひられてゐます。又惡と云ふ字は亞と心の合字で、亞は上下より壓しつぶされた形を表してをり又人の脊の曲つた形を表したものと云はれてゐます。即ち曲つた形の心であるから醜い心で惡に當るわけです。俗に人の顔の醜いのを墓をふみつぶした様な顔だなどと云ひますが、惡は人の心が踏みつぶされて曲つてしまつた心なのであります。

第六に假借とはその字の通り本來字の持つてをる意義を全然離れ單に音を表現する爲めに借りて來て、轉用する方法であります。燕と云ふ字はつばめの形を取つて出來たのでありますが、宴と云ふ字と音が通ずる爲めに酒宴を酒燕と用ひてをります。少場合は異なるが、日本で使用する獨逸、英吉利、佛蘭西なども此の假借に當るわけです。勿論現在支那では日本と違ひ、英吉利は英國又は英司利國、佛蘭西は法國又は法蘭西、獨逸は德國又、德意志と云ふ語を使用してをります。

以上甚だ不完全ではありますが簡単に文字の出来上った方法及び分類法を述べましたが、此の様な事で漢字が出来上ったので現在使用してゐる文字悉くが此の六書によつて分類され、その出来上った方法、原因が判明するわけであります。前漢の時代に出来たといふ説文解字と云ふ書物には九千三百五十餘字が記載されてをると言はれます。又ずつと降つて清の康熙帝の時に編纂された康熙字典には四萬二千三百七十四字が記載されてをります。

(二)

さて以上のべた漢字なるものを書するの所謂書と稱せられるものです。日本でも書道と稱して人間の一つの修業を會得すべき人間道の一に數へられてをります。支那でも六藝の一に加へられてをります。禮・樂・射・御・書・數が即ち其であります。支那に於ては、殷・周・秦・漢の世を過ぎ六朝を経て唐代に至り文字の書法即ち書道

なるものが完成されたのであります。現に存してをる篆書、隸書、草書、行書、楷書が即ち五體の書であります。秦漢以前の文字の總稱である古文をも加へれば六體となります。此等の書體が出来上つて來た歴史などに就いては別の機會にゆづるとして、此等の書は第一に自分の意志を相手に傳へる爲め、又種々の事務を記録する爲めに必要なので、人間が社會生活を営む上に必要缺く可からざるものであるが、其の外に書は日本人及び支那人が特に天地から賜つた特種の藝術であると云ふ事です。書を書の毛筆と墨を用ひたと云ふ事がその原因でもあります。最初述べた様に字の出来上った方法や原因にもよるのです。即ち文字が六書と稱する非常に複雑な方法によつて出来上り、且又立派な藝術家達の苦心努力によつてその書法が考究されて、今日の書道なるものが出来上つたのであります。現在吾々の前に存在してをる古筆の多くは實に立派なものであります。支那では唐代

が最も書道が盛んな時代と云ふ可きでせう。唐代は楷行草篆隸の五體が全く完成された時であり幾多の書の俊才が續出し亂菊秀を競ふた有様でありました。特に楷行草の三體は唐代に至つて初めて完成されたと云ふ可きであります。書道の神様として仰がれてをる王羲子が西晉時代に出て唐代書道の先驅をなしたのでありますが、其等を集大成した唐代の書道は現に我々が其の盛觀に目を奪はれる程のものであります。その唐代の文化を總て取り入れた我々奈良平安朝以來、吾々日本民族の上にも書道なるものが大なる藝術として取り入れられたのであります。日本書道としては假名文字なるものが成立して來た事になり日本民族の特異性を發揮してをるのであります。兎も角も此の様にして吾々は書と云ふものと離れる事の出来ない民族となつたのです。

(三)

今吾々が一枚の白紙に向つて字を書く



(清末吳昌石が國書した石版文)

しませう。書く可きものは純白の一枚の紙であります。太く書くとも、細く書くとも長くとも短くとも、其は書く可き人の意志の越くまゝであります。其の人の精神を通り肉體を動かして書き出された書なるものは其の人の心を反映してをるものです。「心正しければ筆正し」との言は正に此の心を述べたものです。世の中は虚偽や虚榮に満ちてゐます。字をうまく書くこととする作爲の爲めにかへつて立派な字の書けないのは人間の心の動搖の爲めせう。世人の稱讃を得るためとか金錢を獲得し様とかの野望

をつむ必要があるのですが、今述べた様な心の動搖を防ぐ可き心の修業を必要とするのです。字を書く人の心と筆と字とが一體となり、水の流れるが如く淡快なる書が書けたならさぞよい字が出来上るであらうと想像されるのです。私は小學校の下级生の習字の作品の中から、實にすばらしい立派な字を發見して驚嘆した事があります。其は無心に何の屈托もなく自由奔放に書かれた字でありました。吾々には決してそんな字は書けません。何となれば幾何の常識を具へ社會の地位と名譽のある幾分か

の爲めに心が動かされつつ書いた書に立派なものが書けるものではないありません。

吾々は立派な字を書く爲めに研究手練

を擔つてをる心の壓迫による爲めだと思つてゐます。書の面白い所は此處にあると考へてゐます。研究や練習によつて獲得した技術の上に人間として優れた心の所有を必要とする事です。

今次の支那事變によつて、同じく文字の國である支那の國民性を吾々は特に判然と理解する必要に迫られてゐますが、此の書を通じて吾々は案外に手安く、支那民族の優れた一面を理解出来る様に思ふのです。日本の書と支那の書を充分に比較して見ますと支那の書の優れてをる點及び日本人が如何に頑張つてもなか／＼達し得ない特異な一面を發見する事が出来ます。勿論日本の書は日本の書で支那人の及ばない一面をもつてをりますが、此等の相違は根本的な人間性の相違から來てをると思はれるのです。若しも今後日本及び支那の兩民族が本當に相互に理解し合ひ提携し合へたならば、東洋平和の確立は眼前に近いものと考へられるのであります。

信仰相談

擔中村辨康

如何にすれば信仰を得られるか

二問

私は淨土を愛讀さして頂いて居る者です。如來様のお慈悲に浴さし

て頂いて居る一人ですが、眞實の信仰が頂けないので、日夜煩悶苦惱して居ります。罪惡觀、無常觀等よりして切實に信仰の門を開かんとして居るものです。そして自己の罪惡と無常の事實をハッキリと認め、之に直面して三世の因果を信じて居りながら、どうしても素直に如來様のお慈悲を信じ眞實の信念を得ることが出来ないのはどういふわけでせうか。信心しようとする程、お慈悲に遠ざかつて行くやうな氣が致します。勿體ないお話ですが、お念佛を申してもうはべ心で眞心から迸る信心信念がどうしても得られな

いのであります。私は自分の罪を自覺し、最親最愛の人々をも失ひ、自らは現在病床に在り、然かも如何にしてかお慈悲に浴せしめられて頂くやうに念願して居り乍ら、どうしても心底から信心を得ることが出来ないのです。軍人でありながら戦場に花々しく散ることも出来ず、信心も出来ないといふことは何

としたことでせう、矢張信心が足りないのせうか。それとも機縁が熟さない爲でせうか。唯心の彌陀、己心の淨土と云ふやうなことは申さないにしても、信心は自己の心に芽生えない限り信心もあり得ないと思ひます。かう考へて見ますれば本當の信仰が得られない

二答

のは結局自分の信心が足りないのぢやないかと思ひます。然らばどうしたら鐵の如き信仰燃ゆるが如き信念が湧いて來るでせうか。唯だ一心に信じさへすればいいと云つても、どうしてもそれが得られないのです。邪見、嬌慢なのでせうか。否な私にはそんなものはないだらうと思ひます。結局機縁がまだ到らぬのでせうか。先生どうか御教示、お救ひの程を御願ひ申します。誌上にておみちびき下さい。(盛岡日赤病院にて 菊池徳七)

求道の苦悶は實に苦しいもので私も其經驗がありますから、本當に衷心から御同情申し上げます。然し苦しめば苦しむ程入信の悦びはまた大きいもので、全く天地何物にも替へられない悦びを得られるのですから、どうぞ一心に求め抜いて下さい。心から御願ひします。

偕てお尋ねの信仰に入るには何うすればよいかと云ふ問題ですが、お答へとしては至極簡單で「念佛するより外に方法がありません」と申し上げるだけです。成る程入信以前の念

佛は念佛になつて居りません。然しながら「どうぞ信仰に入らしめ給へ」と願ひながら念佛して居りますと、必ず「入信」の自覺に達し得られます。其時期は何時かは分りません。自力の心がなくなつて凡てを如來様に打ち委せ得るやうになつた時が本物になつたのです。自分には驕慢心がないと思つて居ることとその事がまだまだ自力的な氣持であつて、心の底から「何と云ふ淺ましいものか」とつくづく自分の拙さが痛感された時、如來様はすがらざるを得なくなります。すがらざるを得ない痛切な心がそのまゝ如來湯仰の信心なのです。だからあなたはもうそこまで來て居られるのです。もう一步突込めばすぐ入信の自覺を得られます。一心に念佛して御覽なさい。心から如來様に「南無」し得たことその事が入信したことです。もうそこまで來て居るではありませんか。

信じたくてたまらないのに何うしても信じられない御苦悶は本當に御同情に堪えません。私の経験から申しますと、此時代に於て

考へて居る「信仰」なるものは、何か通常と異つた特別な心理狀態であらねばならぬと思つて居るので、素晴らしい變化が起ることを豫想して居ります。其上に如來様を箇在的なもの、例へば人間的な存在のやうに思ふ考へと、此の常に變化して居る天地以外の何處かに永遠に不變な世界があらねばならぬが、何うしてもさう云ふ世界は考へられないと思ふ考へとが衝突して居るので、この矛盾が私達の信眼を閉ぢさせて居るのだと思ひます。之ばかりではありません。之と似た色々な矛盾が無意識的にもまた意識的にも働いて居る爲に何うしても信が開けて來ないのです。

如來様は決して箇在的な存在ではありません。無量壽と呼ばれる大生命です。私達の小生命は之の如來様の大生命の一部分を分けられて居るのですから、私達に取つて如來様は命の親様です。また如來様のおからだは無量光であつてたとへば電流が何處にも通ずるやうに天地にくまなく輝き亘つて居ります。私達のこのからだも心も亦た如來様の慈光に依

て生み出されたものです。私達が常に向上を望んで居るのも如來様の聖旨の變形です。だから如來様までその心が突き抜いて行かなくては氣がすまないのです。

如來様の慈光は決して逃げては行きません。私達は如來様の慈光の中に居るからです。それを感じないで居るのは不傳導體物で包んで居るだけのことです。何が不傳導體物でせうか。私達の誤つた考へがそれです。私達の誤つた考へや、思ひ過ごした考へが私達の感受性を邪魔して居るだけです。然らば何うしたらその邪魔物を拂ひ除けられるでせうか。

念佛です。念佛して居る内に段々芽が出來ます。念佛と云ふ乳を飲んで居る内に自然に眼が開き邪魔な雲が取れて來ます。法然上人は「妄念餘念をも願ふ散亂不淨をも云はず唯だ口に名號を唱へよ。若し能く稱名すれば佛名の徳として妄念自ら止み、散亂自ら靜り、三業自ら調ひて願心自ら發るなり。然れば願生の心の少きにも南無阿彌陀佛散亂の増す時にも南無阿彌陀佛、妄念の起る

「浄土宗讀本」 近く刊行!

中村辨康、大野法道、前田聰瑞三師合著で目下出版を急いでゐる本會刊行の「浄土宗讀本」は愈全部の原稿が出揃ひ、一ヶ月以内には出版に漕ぎつける見込みが付いた。何しろこの種の刊行が少なく、殊に本書の如く一冊で本宗の歴史、教義、實踐、現勢と浄土宗全般に涉つて詳細に渡つて懇切に説かれた書物は殆んど皆無と云つて良い状態なので、その編輯、執筆にも非常な努力が拂はれてゐる。校正、體裁等も念には念をいれて、文字通りの定本とする筈である。

大きさは菊版、組みは五號四分バラルビ付、三百餘頁の大冊となる。寫眞版、凸版等も豊富に入れて、讀本として萬遺漏なきを期してゐる。定價は諸費高騰の折ではあるが奉仕的に二圓以内とするつもりである。

— 信 — 仰 相 談 —

時にも南無阿彌陀佛云々」と云はれて、唯だひたむきに念佛して居れば自然に「信心現起し信心成就す」と申されて居ります。即ち妄念餘念と云ふ電流の通ずるのを邪魔して居る不傳導體物があつても念佛さへして居れば何時か屹度信心の通ずる道が開けて來ると云ふのです。

心配することはありません。もう一息です。あなたが病床で手厚い看護を受け然かも信仰への志を起し得たことを靜かに御考へ下さい。之れ誠に尋常ならざる因縁の然らし

むるところであつて、數多い人の中で、唯だ徒らに不平不満の中に来る日を送り迎へして居る人の中で、特に信仰に志し特に如來様への心を運んで居る其心狀は決してあだおろそかなことではありません。如來様の恩寵です。實際恵まれて居るのです。機縁が熟しつゝあるのです。他の何にも知らない方々と比較して見て考へて下さい。大なる恩寵があなた一人の上に現に加はりつゝあることを御氣付きになるでせう。有り難いことです。如來様の慈悲が色々のものを通ほしてあなたの

上に加はつて居ることをシミジミと考へて下さい。如來の慈悲は遠い處にあるのではなく、苦しいのも淋しいのも皆な如來様の慈悲です。太陽も空氣も水も藥も食物も看護婦も皆な合せてあなた一人を生かさうとして居るのです。隣りベッドに寝て居られる戦友さへもがあなたの心の淋しさを慰めて居て下さるのです。苦樂も喜悲も一切はあなたの心を信仰に向けるための現はれです。あなたが出征なさつたことも病氣になられたことも、イヤ今度の事變そのものさへもがあなたを信仰へ導く機縁でありました。そこに如來様の大きな攝理が働いて居ることを御氣付きになるでせう。それでいいのです。それでいいのです。あゝ有り難いと合掌して一聲稱名すればそれで信仰にはいつたのです。念佛して下さい。念佛の中にだん／＼信眼を開いて下さい。そして周圍に感謝の眼を見張つて下さい。そして一切の恩寵を如來廣大の設備と御考へ下さい。もうそれで信仰にはひられたのです。



俳壇

小樽市 平井善慈

隙間も風もめでたしお元日
許「めでたさも中位なりおらが春」と一
茶のやうな貧乏人も目出度がつてゐる
色々の意味で正月は目出度いものである
が、此の作者は隙間風の寒さに首を
縮め乍らも、うんと力んで、いや、之
も目出度いと目出度い数のうちに入れ
てゐるのを、ほゝえましく思ふ。

大津市日本赤十字陸軍病院

島田 昌 日

露塚をめぐりて去りぬ小提灯

評「露塚」から晩秋初冬の季節感も覺え
るが季節になつてゐないので、假に之
を季節として採用することにした。
新雪の色をした露塚の横つかが、提灯
の明りに映えては消えてゐる光景が眼
に見える。「小」と云ふことから夜寒を
も感ずる。

岡濱市 小宮 昌 平

青々と大根畑の多きたる

評 此のやうな光景を句にしたものは昔
から、どんなに深山あるか数知れない
程であらう。それで此のやうな光景を
詠つて、之で新しい境地を開いてゐ
るつもりで満足してゐてはならない。
只此の句の取柄は、印象が極めて明瞭
なものと、「の」といふ「て」を「は」の用法

である。之に依つて、色々の物に色々
の形で冬がやつて來てたり、大根畑の
大根は青々とした葉を擡げて冬を迎へ
てゐると云ふ句意になる。

前 橋 瀧 源 全 翁

某精神病院に患者の死をとむらひて
人となり佛となりし寒さかな

大 阪 山 岸 善 良

帽子掛にかゝれる帽子寒さかな

東 京 三 野 輪 幸 郎

蜜柑買てをれば富士山うかびをり

新 宮 市 奥 村 映 水

我庭の木犀の香にみんな來よ

長 崎 池 田 眞 三

夕焼と一つになりし紅葉かな

富 山 内 山 添 水

冬晴を競ふ立山眩しかり

奈 良 久 野 佐 太 郎

虎杖の林通りてハイキング

東 京 小 山 謙 念

市中に遠山見たり冬日和

長 野 宮 澤 榮 子

ミシン踏む音と木枯冷たけれ

千 葉 安 田 九 卓
石佛を尾花彫りに刻むかな

名 古 屋 堀 場 典 雄

秋の日の高きに庫裡の灯りけり

高 松 荒 木 は ち

落葉たいてひとり楽しく念佛かな

神 奈 川 深 田 益 吉

秋晴や末吉山の奥までも

栃 木 大 輪 清

霜深き木々に燃れる焚火かな

大 阪 森 正 義

手水鉢水の冷たく夕來し

中 支 神 田 棟 孝

霜枯れの廣野を立てぬ日章旗

若 松 陸 軍 病 院 千 葉 修 也

美しき落葉の早く流れ去る

盛 岡 陸 軍 病 院 佐 野 正 樹

霜月や小雪紅葉にたわむれて

盛 岡 日 赤 病 院 遠 久 時 知

塔に鷲むるれば秋くるゝ

丹 波 中 村 た きの

眞向にともれる洲本腰巻く

小 樽 中 村 茂 樹

燈臺の白き岬の浮寝島

京 都 永 田 七 郎

入瀬大原時雨るるらしく虹かゝる

盛 岡 陸 軍 病 院 小 倉 郊 秋
散りいそぐ山茶花の花手向けたる

大 津 陸 軍 病 院 島 田 繁 正

初冬の夕陽に曙き荷足船

滋 賀 重 野 ふ み 子

小春日の野良にひゝかせ太鼓かな

同 北 角 孝

はれやかに今日霜刈てゐたりけり

同 森 尾 山 茶

藁束を積みたる軒の日向ぼこ

大 阪 目 黒 野 谷 記 三 弘

肌寒しきらりと光る露の玉

同 田 中 秋 水

秋深くなつむりつゞけし寺の猫

山 口 長 岡 見 智

落穂手に我に向き来る傷病兵

會 津 陸 軍 病 院 宮 下 光 雄

山茶花に白衣の兵士笑みて撮る

奈 良 和 田 章 鴻 路

しんくんと麦畑凍てて月白し

石 川 西 村 けん 治 郎

稻拔機とつぶり暮れて廻りをり

投稿規定

官製はがきに一四二句以内
とし「浄土」編輯部俳壇係
あてに送ること。



如來に護られ行く生活

—— 日常勤行式解説 ——

中村 辨康

(十六) 送佛偈 (如來の護念を仰ぎつゝ、また先輩の護念をも御願ひして)

請佛隨緣還本國、普散香華心送佛。
願佛慈心遙護念、同生相勸盡須來。

(法事讃ニ出ヅ)

(國譯)

請ふらくは佛、緣に随つて本國に還りたまへ。
普く香華を散じて、心に佛を送りたてまつる。
願くは佛、慈心をもつて遙かに護念したまへ。
同生も相勸めて。盡く須らく來るべし。

(意譯)

初めに御勸請申し上げた十方の諸佛如來、教主釋尊、救ひ主阿彌陀佛、先輩者たる觀音勢至等の諸大菩薩様方よ。どうぞそれぞれ、御縁の随ふところに依つて御本國にお還りを願ひたうございます。私達は諸佛諸尊御照護の下に、此勤行式の順序に依つて嚴肅におつとめをさせて頂き、今それを終らふとして居りますので、廣大なる大宇宙に普く香煙を捧げ妙華を散らして、御佛様方をお見送り申し上げます。どうぞ御佛様方よ、御本國にお還りあそばしても、御慈悲を垂れられ遙かに私達をお護り下さいまし。

また私達は今信仰に入つたばかりでまだ未熟者でございますから、私達と同じ信仰に依て既に如來様のお淨土に往生し佛作佛行に精進して居られる多數の先輩方も、どうぞ相共に御勸め合

ひ下さいまして、皆さんで一緒に私達を護つて下さるやう御來臨を御願ひしたう御座います。

私達は如來様の御護と、先輩の皆様方のお護りとの下に、いよく信仰を進め以て出來得るかぎり如來様の子としての務めを果して行きたいと念願して居ります。

講 賛

一切の現象は皆な悉く「縁」である。

「縁」なくしては何事もあり得ないし、何物もあり得ない。

佛と雖も皆な縁に依て成佛し、縁に依て淨土を建立されて居るのである。

私達もまた縁に依て人となり、縁に依て、自分の世界を造つて居る。私なら私自身でなければ本當には感ぜられない私だけの世界がある。それと同じやうに人々は夫々の特性に依て産み出し造り出した個々の獨自の世界の中に生活して居るのである。然しその個々の世界は決して他と全然無關係のものではなく、其成立條件である無數の「縁」が幾重にも重なり重つて非常に複雑な關係を持つて居る爲に、殆んど同一の世界なりと思はしめられて居る程、密接な關係をもつて居るのである。

誠に一切の諸現象は「縁」の現れである。

如來の來たり給ふもまた還り玉ふもすべて「縁」に隨ひ「縁」

に依てなされねばならないものである。

私達は今ま此の「勤行式」を終らうとして、曩に御招待申し上げた諸佛如來を、夫々御本國に御送り申し、遙かなる彼方よりの護念を御願ひしやうとして居るのであるが、それもこれも皆な御縁に依るものである。

私達には全く力はない。力はないけれども「信」と云ふ強力な「縁」がある。

この「縁」こそは如來様と最も親しい縁であり、最も近い縁であり、最も強く増上し行く縁である。

如來様をお慕ひし如來様の御名を呼び如來様のお慈悲を仰いで居る私達の氣持は、恰度、子の親に對する絶対信頼の氣持に均しい。これ正しく「親縁」である。

善導大師は

「彼（如來）此（私達）の三業（身と口と心）相捨離せず故に親縁と云ふ」

とて、私達の如來様をお慕ひする禮拜と、如來様の御名を呼びたてまつる念佛と、如來様を慕つて忘れない憶念との三に對して、如來様の方でも常にそれを見、きき、憶念して居て下さるから、最も親しい縁が私達と如來様とのあいだに結ばれて居るのだと云はれて居る。

また私達が念佛する時、如來様を近々と感ずるのは云ふまでも

ないことである。私達は遠方のかたなる如來様に南無して居るのではない。

寢ては夢さめてはうつゝ束の間も

忘れがたきは彌陀のおもかげ

と云ふ歌のやうに、朝な朝な佛と共に起き、夕な夕な佛と共に寢て、片時も離れて居ないのであり、赤ン坊が母の乳房に吸ひついて、うまいまと乳を飲んで居るやうに、如來様の慈悲の甘露乳を頂いて居るのであるから、こんな近い「縁」の姿はない筈である。随つて如來様は私達の欣慕する孝順心のやさしい幼な心に對して常に強い「増上縁力」と云ふ力を加被せられ、私達の成長をひたすら願つて居て下さるのである。

この増上縁力は色々な姿を以て私達の生活の現在未來を通じて豊かさよりよき安らかさを與へ給ふのであるが、善導大師は大きく之を五つに別け「五種増上縁」として居られる。それは

一、滅罪増上縁——過去の行爲に對してそれを消除し
二、護念得長命増上縁——現在の遠縁逆縁に對してそれを順縁とし

三、見佛増上縁——現在の順逆兩縁を活かして常に感謝せしめ

四、攝生増上縁——臨終の諸縁を調へて淨土へおさめとり

五、證生増上縁——未來永劫への保證となし給ふ

であるが、このうち滅罪と護念と見佛とは現在に於ての加被力で

あり、攝生と證生とは現在から未來へかけての加被護念力である。私達が信仰にはいつて如來様に歸命し念佛する時、私達は煩惱具足の身ではあるけれども、私達の小さな命は如來様の大きな無量壽の中に攝め取られて永遠に絶對安全である。

かの來迎和讃に「攝取不捨の光明は念ずるところを照すなり、觀音勢至の來迎は聲を尋ねて到るなり」とあるやうに、念々毎に如來は來現したもふのであるが、命の終らんとする時には、一切の障礙縁は影をひそめて無爲涅槃の淨土に往き生れる「攝生増上縁」の力が平生よりも一層強く働いて下さるから如來様の中にすつかり攝められる筈である。

されば私達の魂は「永遠の生」として保證されて居る譯で、しかもそれは喜びの中にもろくの苦あることなく且つ三惡道の名さへなき常樂精白の淨土の世界に於てなされ行く生である。この永遠の「眞生」が保證されて居ることが「證生増上縁」と名付けられるものである。

かくの如く私達は私達の生命に關しては寸毫の心配もいらないのである。だから「心」が安定し「命」が安立して居る譯でもある。

それも平生に於て常に佛を見たてまつることが出來て居るからであらう。

一般に「見佛」と云ふことは「如來の御姿」を見ることのやう

に思ひ做されて居るけれども、如來様は「無量の相」を持つて居られるのであつて「佛像」のやうなお姿のみが如來様の相と限られては居ない筈である。唯だ人間のやうなお姿に現はし奉る時お釋迦様に似せて然も何んな小さな部分も皆な完全な状態であるやうに現はさざるを得ないからこそ、あゝ云ふお姿を表現したのである。

また假に佛像のやうなお姿を見奉つたとしても、若しそれが外形的なもののみのことにと終つてしまつたならば、まだほんものとは云はれないのである。實には如來の大慈悲心を拜まなくては嘘である。私達が亡き人の肖像畫を見る時、その肖像を通して其人の人格を見、其人の心狀を想ひ浮べなくては本當に其人を見て居るものではないやうに、如來様のお姿を通して如來様のまゝろが見えなくては本當の「見佛」とは云はれないのである。

隨て感覺的なものばかりが「見佛」ではない。釋尊の云はれた御言葉にも

「緣起を見るものは法を見、法を見るものは佛を見る」

とあるが、之は一切の現象の中に緣起の相を見得るものは正法をさとりに行くものであり、正法をさとりに行く者にして初めて、日常生活の事々物々の中に佛心を有り難く拜むことが出来る筈であるとするもので、つまり理を通しての見佛を指したのである。

また私達の信仰は佛心を見るものであり、また佛心を見得る限

り、佛心に添ひ奉るやうに生活したいと念願しないものはない筈である。勿論思ふやうには出来ないかも知れない。然し出来ないからと云つてその念願まで捨て去るやうでは畢竟親不孝の心狀である。少くとも孝順心のない信仰はまだ佛心を知らないものであると云はれても仕方がない。自分の分相應に出来る限りを盡くして如來の御旨に契ふやう誠心誠意ことをなして行くのが本當である。

彫刻師は一藝々々に佛像を彫り起して行くが、私達も私達の目に觸れ手に觸れるものを悉く活して行きたいものである。一切の事々物々の中に如來の慈悲を感じ得し、そのお慈悲を疵付けないやうに大事にして行きたいものである。

つまり如來照鑑の下に日常の「日暮し」をさせて頂いて居ると云ふ精神的感覺を持つ者は、矢張りまた常に佛を現象の中に見て居るものと云つて差支ない。

かう云ふやうに理の上にも行爲の上にも「見佛」の事實はあり得るのである。但しそれが單に或は理念に止まり或は道德に止まつて居るだけならば「法身觀」的なものに過ぎないのであるが、そこに少しでも「有り難い」氣持「勿論ない」氣持即ち如來様のお慈悲を感じ行くものがあるならば宗教的信仰的な意味の「見佛」と云ひ得るのである。

世には「好相感見」を非常に高度の信仰として居るやうである。

それは非常に眞摯な信仰であり、また事實有り難いことでもある。然し乍ら或る種の精神訓練をなせば出来ることで、心理學的には一種の幻視である。

この幻視的な「見佛」もそれを通して大慈悲を見得ることが有難いのである。だからお慈悲を感じ得るものであつたら、すべて眞義の見佛である筈である。随つて念佛者は皆な見佛者と云ひ得るものである。

是れ即ち「見佛増上緣」の然らしむるところであつて、善導大師は「佛の三力（大願業力、三昧定力、本功德力）が加持されて現生に於て佛を見たてまつることが出来る」と云はれたのである。

また常に佛心を見得るものは、常に罪が洗ひ清められる。出来ないながらも如來様のみむねに相應して行きたいと云ふ念願を以て生活するのであるから、過去の一切の罪障は如來様の慈光に照らされて霜の朝日にあつて消え行くやうに消え去つてしまふ筈である。

成る程私達はきかない心を持つて居る。きかない行爲をもして居る。然しながらあとからあとからそれが悔まれて懺悔の念佛をしつゝ常に、悔ひ改めをして居るのである。懺悔すれば清淨になるから悪いことをしても差支ないと思ふやうな、そんな横着な氣持ではいけないけれども、常に如來様を念じて行くものは常に誠意を以て懺悔し行くものであり、常に如來様のお慈悲に擁護され

て居るものである。

「觀音勢至その勝友となる」

と御經にもあるやうに觀音様や勢至様が勝れたる友となつて私達を護つて居て下さるのである。是れ如來様の「護念増上緣」の賜物であり、これに依つて私達は私達の日常生活に現はれる一切の違緣逆緣を悉く順緣に變化して「幸せな者」と感じて行く身になれるのである。その上與へられた壽命も縮められることなしに自然に完全に延ばし得ることにもなるから、善導大師は特にこの「護念増上緣」に「得長命」の三字を付け加へて「護念得長命増上緣」と云はれたのであるが、實際此の「護念増上緣」こそは現實に於ける私達の眞實の喜びである。赤ん坊が一切を母親に委せ切つて居るやうに、私達も一切を如來様にまかせ切つて、妻のことも子供のことも商賣のことも生活のことも有りとあらゆる凡てを同じ信仰に依て如來様の護念の下に、それ／＼自分の分々に應じて幸せになるやうに念願しつゝ、しかも出来るだけ之を他にも及ぼし「同生」の喜びを喜び合ふのである。

然し讀つて考へて見るに、私達は全く拙ないものである。鬼もすれば誘惑の外魔に負け、煩惱の内魔に犯されて、或は横着な心を起し或は自惚れの心を起し或は人をのしり或は人を恨み或は物をおしり或は物を濫用し或は事を亂し或は事を破つて、一つとして録なことをして居ないのである。耳四郎ではないが、悔んで

も悔んでも、あとからあとから悪い事ばかりして居るのである。

茲にどうしても如來様の加護を仰がざるを得ない譯があるのである。どうしても觀音勢至を初め奉り、同信同生の諸先輩方の護念をも仰がざるを得ない譯があるのである。

しかもそれは念佛を通してのみ出來得ることである。何となれば念佛は如來の本願だからである。

この本願の念佛、諸行の中から選び抜いた選擇本願の念佛に依る滅罪見佛護念等の増上緣に和合して行く信行こそは唯一無二の私達に與へられた恩寵である。

増上緣 ↓ ↑ 念佛

この因緣なくしては私達はよくなれない。救はれない。淨土への生れ替りは出來ない。生死流轉の海を渡ることは出來ない。

今私達は此の日常勤行式を終るに臨んで、一層痛切に感ぜられるものは、如來増上緣の加祐であり、其中でも一層強く望まれるものはこの如來の護念である。

随つて香華を散じて遙かに如來を御送り申し上げながらも偏へに護念を御願ひする譯である。

そして既に淨土に生れて居る同信の人達をも心に思ひ浮べて、雲の如く群り來つて私を護念し私の信仰の退轉を防ぎ私の信仰の増上に助力を惜しみ玉ふなど御願ひする譯でもある。

想へば有り難いのは此の日常勤行式である。最初の「香偈」か

ら此の最後の「送佛偈」に至るまで寸毫の透き間もなく、私達を導き私達を向上せしめ私達の信仰を培養して呉れたこと、實に驚嘆に値ひするものがある。

此の勤行式は單なる儀式の順序配列ではない。私達を信仰に導く深い／＼の念願から組み立てられたものである。

噫。私達の日常勤行式よ。

一體誰が之を造つて呉れたのであらう。

そして何と云ふ親切な組立であらう。

その親切さは全く想像も及ばないのである。

しかも私達は此の親切な日常勤行式を與へられたのである。

私達はほんとに幸せ者である。

この故に私達は常に感謝を以て此の日常勤行式を頂戴し、常に至誠の眞心をこめて一心にこの「おつとめ」をして行きたいものである。

(字解)

隨緣——一切の現象は皆な緣に隨つて起るものであるから、佛の來り玉ふも還り玉ふも亦た緣に隨ふべきである。

また諸佛の本土も夫れ夫れの因緣に依つて建立せられたものでもある。

本國——淨土のこと、諸佛には夫れ夫れ淨土がある。釋迦牟尼佛の淨土は無勝莊嚴土、觀音菩薩の淨土は普陀洛山の淨土で

ある如きものである。

慈心—大慈悲心即ち佛心のこと。

護念—五種増上縁の一。

同生—同生に「已生」と「今生」と「當生」との三種がある。已

生とは既に極樂に生じて居る人のことであり、今生とは今生ぜんとしつゝある私達のことであり、當生とは之から信仰に入つて淨土往生を願求すべき人のことである今此の

「念佛偈」に云ふ「同生」は已生の人達を指して居る。

相勸—皆な相共に勸め合つてと云ふ意である。

盡須來—皆な來つて護念し玉へと云ふ意である。

御願ひ

終りに臨んで一言お詫び致します。前後十六回に亘つて一通り「勤行式」を諸君と共に味つて参りましたが、言葉が足りなかつたり、誤植の爲に意味をなさなかつたりしたところが多々あつたやうです。然し乍ら大方の絶大なる御支持に依て兎も角も満了したことは筆者の感謝推く能はざるところで、厚く御禮を申し上げます。何れ他日大修正を加へて單行本としたいと思つて居りますから、御氣付きの點がありましたら、御面倒ながら御指示下さいますやう御願ひいたします。尙ほ此次は「般若心經」を味つて見たいと思つて居りますから、是非また御愛讀を御願ひいたします。

本年度最終の理事會

明年度の發展策を審議

去る十二月八日午後二時から

中村辨康各氏

明照會館樓上で本年度最終の本

編輯員

會理事會が開かれた。里見會長、中村理事長を始め各理事出席の

東慈道君還る

下に十五年度豫算案の審議に入

本編輯部員東慈道君は昨年九月出征以來南支方面に従軍奮戦

り、原案を承認して後、會の將來に就いて種々懇談的に討議し

月出征以來南支方面に従軍奮戦半歳にして病のために一時入院

た。結論として來年度皇紀二千

中であつたが、この程除隊とな

六百年の意義深き年を期して一層の發展を約束して散會した。

り、大陸戦野の貴重な體驗を引携げて再び本誌の編輯に活躍せ

當日の出席者大村桂巖、石塚

らるゝ管同君の野戦病院日記抄

龍學、里見達雄、江藤滋英、

は本誌に連載されて好評を博し

木村玄俊、安井大學、藤本了

てゐる。

泰、福田有誠、竹石耕善、稻

陸海軍慰問淨土寄附者芳名は次

田稔界、佐藤良智、前田聰瑞

號に纏めて發表いたします。

編輯後記

◆輝かしき皇紀二千六百年を迎えて謹んで誌上より讀者諸賢に御挨拶申上ります。

◆事變下に迎へるこの光輝ある年を如何に迎ふべきかは本號に御執筆の諸先生の文章の中に色々な形で説かれてあります。何卒信仰

を倍加され、よく難局を打開されて新東亞建設の聖業を完からしむるため御努力あらんことを。

◆本號は御覽の通り良い原稿が幅濫して、編輯者も選擇に迷ふ有様。紙数が制限されてゐるため多数の原稿を次號に廻さなければならぬ次第となりました。讀者にも筆者にも御諒承を願ひます。これで見ても本年度の活躍には大いに見るべきものがあると思ひます。

賀正

法然上人鑽仰會

理事

會長 里見達雄
理事長 中村辨康

眞野正順 江藤滋英 藤本了泰 佐藤賢順
稲田稔界 木村玄俊 横内淨音 安井大學
岩野眞雄 長谷川良信 高瀬承嚴 杉浦演順
福田有誠 日比野諦我 渡邊義遠 巖谷俊興
大谷玄旭 久保田量遠 友松圓諦 佐山學順
栗本俊道 佐藤良智 安富賢亮 小川隆誠
桃野春興 小林大巖 小林義道 伊藤光信
萬里小路麟雄 稻垣眞我 大河内貫誠 鹽庵義清
眞野耕雲 福田關正 小橋麟瑞 日野西德寶
江上秀靜 前田聰瑞

◆本會出版物の御註文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御註文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引替は一切お断り申上ります。

◆その他の問合せは往復はがさかまたは返信料同封で御願します。

◆會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の広告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱
株式 正路喜社
會社 正路喜社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 一月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和十四年十二月三十日印刷納本

昭和五年一月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ポ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース装)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃三郎・岡本かの子
倉田百三・郁芳隨園著

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十四年十二月廿日印刷納本 昭和十五年一月一日發行

淨

土 第六卷 第一號

定價金十二錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣等
外地定價金十三錢